

求道

第四卷

第三號



(行發回一月每) 行發日四十月六年十四治明

可認物便郵積三第 日六十二月二十年一十三治明

求道第四卷第叁號目次

求道

◎忠愛至孝之情

◎如來の本願

感謝

◎惟佛是真◎吉崎回想◎那谷觀音◎事蛇蝎に同じ◎七里恒順師◎他力尊ふとや蚊屋の中◎無意識の冥合◎自然法爾◎生育我身大悲母、西方教主彌陀尊◎不請而來、無問而吐◎住蓮房の墓◎堀之内、金谷

◎到彼岸

講話

近角常觀

◎巨萬の富よりも嬉し

告白

津田常没

◎歎異鈔一第三章(續)

歎咏

◎遊魂縁想(短歌)

左千夫

求道

第四卷 第叁號

忠愛至孝の情

嗚呼吾人仰ぎて大聖釋尊の慈父に順ひ奉り、如來彌陀の悲母に懷かれまゐるとき、忠愛至孝の情胸に滿ち、身に溢れて欲願愛悦の涙に堪へざる也。

天親菩薩大聖世尊の膝下に跪きて彌陀攝取の悲懷に抱か
る、
信樂の情歎しがたく淨土論の開卷劈頭啓白したまはく世尊我
一心に盡十方無礙光如來に歸命したてまつりて安樂國に生ぜ
んと願す。

他力敬虔の信仰を實驗して、彌陀の淵源を闡明したまひし宗
師曇鸞和尚は、天親菩薩の衷情を遺憾なく審かに味ひたまひ
て曰く、

夫れ菩薩の佛に歸することは孝子の父母に歸し、忠臣の君
后に歸する、動靜已に非ず、出沒必ず由あるが如し、恩を知
りて徳を報ず、理宜しく先づ啓すべし、又所願輕からず、

◎短篇四章(長詩)

◎たとへ歌(長詩)

◎登嶽詠草(短歌)

紹介

甲之 巖 志津 眞 兒

◎生死問題◎歎異鈔講義◎小供ころろ◎丁未課筆

時報

◎傳道日記
◎現時青年の信仰問題
◎同情の源

近角常觀

講話

求道學舎

(本郷森川町一番地)

第一 求道會

(九段坂佛教俱樂部)

第二 求道會

(日本橋綱殼町説教所)

若し如來威神を加へたまふにあらざるは將た何を以てか達
せん、神力を乞加す、所以に仰て告げたまへり、我一心に
とは天親菩薩自誓の詞也、言は無礙光如來を念じて安樂に
生んと願す、心心相續して他の想、間雜すること無きなり。
是真個に菩薩の佛に歸したまへる至情にして、直に吾人が佛
に歸し奉る真心なり、實に釋尊は此土に來現し佛陀の光明を
傳へて、我等無明に酔ひ、三毒に苦めるものを醒覺したまひし
大慈父にして、彌陀佛は永劫の昔より我等を悲憫したまひて
彼安樂の國に迎へんとて召喚したまへる大悲母なり、吾人此
の如きの父、此の如きの母あり、豈人生苦海の風濤に櫂まん
や、唯此父母に順ふて盡十方無礙光の攝取を仰ぐのみ、聖人曰
く、歸命といふは釋迦彌陀二尊の仰に順ひ召に叶ふとまふす
言也と、吾人は此の如き廣大無碍の恩徳を蒙る、唯々命のま
に、従ひたてまつりて動くも靜かなるも、出るも、入るも、
少しも自己の計ひを加ふべからず、偏に如來の御計ひに従ひ
たてまつるなり、いかで此の如き中心を慈親の下に告げたて
まつらて止むべき。是れ天親菩薩の忠愛至孝の啓白にして、ま
た我等が如來の子として則るべき摸範なり、聖人常に此芳跡
を慕ひたまひて正信偈の初に曰く、無量壽如來に歸命し、不

可思議光に南無し奉ると。

信卷に曰く、乃し如來の加威力に由るが故に、博く大慈廣慧の力に由るが故に、清淨眞實の信心を獲る、是心顛倒せず、是心虛偽ならずと、嗚呼我等貪瞋煩惱の中に清淨の信心を生ずる所以のもの、如來直接の威神を加へたまふにあらずんば、いかてか此不可思議の事實あらむ、聖人曰く、釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり、豈仰て神力を乞加せざるべけんや。

我一心とは天親菩薩自督の詞也と、嗚呼自督の文字何ぞ切實なる、信仰は畢竟内心の自督のみ、自覺のみ、冷煖自知、如來大悲の淵源に汲みて身自ら光明中に懷抱せらるる也、故に曰く、言ふころは無礙光如來を念じて安樂に生れんと願ふ、心心相續して他の想、間難することなき也と、是れ如來大悲の恩徳に對して忠愛至孝の情止むべからざる一心にあらざるや。

聖人信卷に三信の字訓を以て此一心の中に蘊蓄せる信念の秘奥を披瀝して曰く、至心と言ふは至とは即是眞也、實也、誠也、心とは即是種也、實也と、これ如來に對するまごころなり、まことなり、偽なきなり、虚しからざるなり、うつはり入つ

如來の本願

我生れしより常に如來の本願を聞き、又自ら之を口にせり。然れども如何に如來の本願の尊きかを知らざりき。如來の本願とは大慈大悲の如來か我等十方の衆生に對して注ぎたまふの涙也、嗚呼一切の群生、昏々として闇より闇に迷ひ、冥より冥に入り、日夜苦惱の海に沈み、瞋憎の叫を揚ぐ。如來大悲の御心豈默視したまふに忍びんや、是れ五劫思惟の來る所永劫修行の成就する所以、大慈矜哀の情は即ち是れ如來清淨の願心也。和讃に曰く、

如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情をすてずして、
回向を首としたまひて、大慈心をば成就せり。
と嗚呼本願は慈心の絶叫也、大悲の直射也、召喚の勅命也、救済の宣言也。生類生きたし生けるもの、人間善きも悪しきも、あらゆる衆生の上に常に心のあらむかぎり盡して傾けたまふ親心也。世親讚して盡十方無礙光如來と呼びたまふ所以にあらずや。

人生此親あり、此如來あり、此慈悲あり、此本願ある、豈喜ぶべきの至ならずや。若し此御親ましまさずば、人生は蕭颯

らはぬなり、ものゝみとなるなり、懸實なるなり、充實せるなり、又曰く信樂と言ふは信は即是眞也、實也、誠也、滿也、極也、成也、用也、重也、審也、驗也、宣也、忠也と、これ如來に對して眞實なるなり、至誠なるなり、満足せるなり、極成せるなり、信用するなり、敬重するなり、審決せるなり、

實驗せるなり、宣白するなり、忠實なるなり、樂は即是欲也、願也、愛也、悅也、歡也、喜也、賀也、慶也と、これ如來の恵みにあてがるなり、ねがはしきなり、よみするなり、ほへむなり、みをよろこばしむるなり、こころをよろこばしむるなり、信を得てのちむずとよろこぶなり、佛のみもとに生れ得べしとかねてささよりよろこぶなり、天に踊りてよろこぶなり、地に躍りてよろこぶなり、又曰く欲生と言ふは欲即是願也、樂也、覺也、知也、生は即是成也、作也、爲也、興也と、これ如來のみもと生れんと願望するなり、愛樂するなり、自覺するなり、信知するなり、成就するなり、振作するなり、云爲するなり、興起するなり、知恩報徳するなり、粉身碎身することなり。一一の文字字訓を辿ると雖皆是れ聖人が内心に於ける純潔信愛希望の信念自から結晶凝結して白玉の文字となれるもの、字訓即ち聖訓にして即ち是れ如來に對する一點疑垢の雜らざる信樂、結局信の一つにあらずや、人生此の如きの聖訓あり何等の至寶ぞや、況んや此至寶を獲得して吾人の胸中此信を賜ふ、嗚呼人生の至幸亦何ぞ之に加へむ。

として秋天の寂寞たるが如けんのみ、古歌に曰く、

寂寞の苦の岩屋の静けきに

涙の雨のふらぬ日をなき

日藏上人が御嶽の笙の窟に籠りてよみたまへる歌とかや、中将姫の當麻の山に棲みて清き心を以て日夜念佛したまひしも此御親を求めたまふの心にあらずや。されど親の御聲の聞こえぬ間は、如何に切實に叫びて、血を吐かんばかり求むとも寸時も其心を安んずべからず。如何となれば、人間の清き心は濁り心の雜れば也。人間の眞實の行は畢竟虚假の行に過ぎざれば也。善導曰く、

縦使ひ身心を苦勵して、日夜十二時に、急に走め急に作して、頭燃を炙ふが如くする者、衆て雜毒の善と名く、此雜毒の行を回して、彼佛の淨土に來生せんと欲するは必ず不可也

と、我筑前博多に遊びて石童丸親を求むるの琵琶謠を聞く、其曲凄絶にして其聲哀し。江州の司馬青衫濕ふの慨なくんばあらず。彼高野に上りて面り親の前にありて、親の名を呼ぶ、而して親自ら名のるに非ずんば、彼は遂に號泣悶絶すとも遂に其心を安んずべからざる也。

法然上人四十年來此親を求めて得ず、七日斷食して清涼寺に參籠し、五回一代藏經を熟讀し、而して得る所なし、善導の散善義を繙讀する三回、忽爾一心專念彌陀名號の文字を讀みたまふに至りて、一道の光明あり。曰く、彼の佛の願に順ふが故にと、嗚呼彼の佛の願あり、佛の本願あり、嗚呼本願は親の名のり也、親の我等迷兒を求めたまふ呼聲也。正覺の大音、響十方に流る。人生茲に始めて本願の宣言あらはる。法然聖人揚言して曰く、選擇本願念佛集、南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本と、念佛は親を求むるの聲に非ず、親の求めに順ふの聲也、選擇本願の念佛也。親鸞聖人は遂に其奥底を極めて言く、歸命と云ふは本願召喚の勅命也と。

此に於て人生始めて南無阿彌陀佛の大慈親の聲を聞く、十方の衆生初めて如來の悲憫を蒙れる同胞兄弟たるを知るを得たり、既に人生此親あり。此兄弟あり、和讃に曰く

智度論にのたまはく、
如來は無上法皇なり、
菩薩は法臣としたまひて、尊重すべきは世尊なり。

嗚呼釋尊は此土に應現したまへる慈父、彌陀は盡十方無礙光の慈懷に攝取したまふの慈母、聖德皇や、法然上人や、親鸞聖人や皆是れ煩惱の林に遊びて神通を現じ、生死の藪に入

りて應化を示したまふもの、人生は春風幽々として一大家庭を形作れるものにあらずや、曇鸞和尚曰く、同一に念佛して別の道なきが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内皆兄弟たる也、眷屬無量なり、焉んぞ思議すべけんやと。故に人生清淨と云へば佛の清淨あるのみ。人生眞實と云へば佛の眞實あるのみ。聖人至心を釋して曰く、

一切の群生海、無始より已來、乃至今日、今時に至るまで、穢惡以染にして清淨の心なく、虛假諂僞にして眞實の心なし、是を以て如來、一切苦惱の衆生海を悲憫したまひて、不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひし時、三業の修したまふ所、一念一刹那も清淨ならざることなく、眞心ならざることなし、如來清淨の眞心を以て、圓融無碍、不可思議、不可稱、不可説の至徳を成就したまへり、如來の至心を以て、諸有の一切煩惱、惡業、邪智の群生海に回施したまへり、則是利他の眞心を彰す、故に疑蓋雜ることなし。斯至心は則是、至徳の尊號を其體と爲る也。

吾人は眞實ならざるが故に必ず疑あり、清淨ならざるが故に煩惱多し。是吾人が本來信心なき所以、絶對に愛樂なき所以。此の如き疑多き我等を信じ、此の如き煩惱多き我等に慈愛を

注きたまふ、是如來大悲の信樂に非ずや。聖人信樂を釋して曰く、

信樂と言ふは則是、如來の満足、大悲、圓融、無碍の信心海なり、是故に疑蓋間雜あることなし、故に信樂と名く。即ち、利他廻向の至心を以て信樂の體と爲す也。然るに無始より、已來一切の群生海無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて清淨の信樂なし、法爾として眞實の信樂なし。是を以て無上の功德値遇し難く、最勝の淨信獲得し難く、一切の凡小、一切の時の中に、貪愛の心に能く善心を汚し、嗔憎の心に能く法財を燒く、急に作し、急に修して、頭燃を炙ふが如くすれども、衆て雜毒雜修の善と名く、亦虛假諂僞の行と名く、眞實の業と名づけざる也。此虛假雜毒の善を以て無量光明土に生れんと欲する此必ず不可也。何を以ての故に、正しく如來菩薩の行を行じたまひし時、三業の修したまふ所、乃至一念一刹那も疑蓋雜ふることなきに由て也。斯心は即ち如來の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因を成す。如來苦惱の群生海を悲憫したまひて、無碍廣大の淨信を以て、諸有海に廻施したまへり。是を利他眞實の信心と名く。

我等疑心多きが故に如來の國に生れんことを欲はず愛樂の心なきが故に己を捨て、人に施し、我が功德を廻らして他に向はしむるあたはず、人間は畢竟利己の動物也、人生は飽まで争奪の修羅場也。若し如來矜哀の涙あるにあらずんば、我等苦惱の有情いかでか解脱の津梁を得ん。佛陀の信樂は吾人の上に注きたまふの大慈悲なり、如來の本願は吾人を招喚したまふの勅命也。聖人欲生を釋して曰く、

欲生と言ふは則是、如來諸有の群生を招喚したまふの勅命也。即ち眞實の信樂を以て欲生の體と爲る也。誠は是れ、大小凡聖定散自力の廻向に非ず、故に不廻向と名くる也。然るに微塵界の有情煩惱海に流轉し、生死海に漂没して、眞實の廻向心なく、清淨の廻向心なし。是故に如來一切苦惱の群生海を矜哀したまひて、菩薩の行を行じたまひし時、三業の修したまふ所、乃至一念一刹那も、廻向心を首として大悲心を成就することを得たまへるが故に、利他眞實の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり。欲生は即是廻向心なり。斯則大悲心なるが故に疑蓋雜ることなし。

嗚呼大なる哉如來の廻向、偉なる哉如來の本願。聖人、本典開卷、筆を執りて曰く、謹んで淨土眞宗を案するに二種の廻

向あり、一には往相、二には還相、往相の廻向に就て眞實の教行信證あり。と、聖人は如來廻向を以て淨土眞宗を開關したまへり、而して其廻向の本源は即ち如來の本願也。故に行、信、證、眞佛土、化身土の各卷、皆如來の本願の淵源より流れ來らざるはなし。嗚呼本願力の廻向何を其れ偉大なる、佛天の蔽ふ所、佛日の照す所、十方の衆生、此の如き大本願によりて、初めて、眞實清淨の大慈大悲を廻向したまひ、歡喜愛樂の念吾人が心中に溢れ來らざるはなし。是れ二尊膝下に歸命したてまつる論主自督の一心たらざるなし。聖人、畧本三信釋の結文に曰く、

三心皆是大悲廻向心なるが故に、清淨眞實にして疑蓋雜ふることなき也、故に一心也、之に依て師釋を披きたるに云く、西岸上の人ありて喚て言く、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、衆て水火の難に墮せんことを畏れざれと、又言く、中間の白道とは、即ち貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生心を生ずるに喩ふる也。仰て釋迦の發遣を蒙り、又彌陀の招喚したまふに藉りて、水火の二河を顧みず、彼の願力の道に乗ずと、是れ知ぬ、能生清淨願心とは、是れ凡夫自力の心に非ず、大悲廻向の心なるが故に、清淨

願心と言へりと。

是善導大師の順彼佛願故と宣ふ所以、法然上人の選擇本願念佛と宣ふ所以、親鸞聖人が若は行、若は信、若は因、若は果、若は往、若は還、一事として如來清淨願心の廻向成就したまふ所に非ることあること無しと宣ふ所以に非ずや。南無阿彌陀佛、

設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。



感謝

惟佛是眞

我江州長濱に傳道して、九年已前日本各地を巡回して此地に最後の演説を爲したりし昔を想ひ、轉じて越前敦賀に入りて、其年の夏、講習會を開きし當時を偲ふ、松原の長沙、金崎の登覽一として昔日を回想するの媒たらざるはなし、而して當年講習會の紀念として遺したる一小夜學會は今や發達して甲種商業學校として幾多の青年を教育しつゝあるに至る、人事の變遷は盛衰常なしと雖、佛徳の威力は山高水長と共に稱なかるべし、聖徳太子常に子孫を誡めて曰く世間虛假惟佛是眞と、嗚呼人生は唯佛の眞實あるのみ。

吉崎回想

蓮如上人の祥月命日母を奉じて吉崎に參詣したてまつる、菜花十里老若踵を接して詣つ、上人の眞影を拜して清秀の風手靈氣人に迫る、山上の空堀を拜して坐るに當年の經營を想

ひ、又堂宇漸く成りて一朝回祿の爲に灰燼に歸したりし昔を回想し、御鞋の緒くひ入さらりと御入候まで京田舎御辛勞したまひし上人の御教化を仰ぎたてまつる、又親しく火災當時の御文を拜聽するに及び三界無安猶如火宅を眼前の事實に諭して長く無爲法性の淨刹をありありと慕はせたまふ、蓋し本光坊が身を火中に投じて聖人直筆の證卷を取り出さんとし脇を割きて之を藏し身之に殉したるも洵に此時の事なりと、誠に知りぬ、大涅槃を證することは願力の廻向に藉りてなり、還相の利益は利他の正意を顯す也、而して往還二種の回向は畢竟南無阿彌陀佛の一のみ、聖人曰く『煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はすべてのこと、みなもてをらごと、たはごと、まことあることなきに念佛のみぞまことにておはします』と、嗚呼千歳不滅の南無阿彌陀佛なる哉。

那谷觀音

舊友に伴はれて北陸の靈蹟那谷觀音に詣す、地は越前金津に隣す、嘗て其近傍に棄兒あり、拾ひて之を養育せしもの即是香月院深勵師也、世人稱して那谷觀音の示現なりといふ、予靈蹟に詣し、幼時師が講義を認讀せし昔を思ふ、予十五歳

京に遊び爾來三年三帖和讃を研究せしものは是れ現時聖人か信仰を味ひ奉るの媒たらざるはなし、而して最も怪むべきは爾後内外高等の學校に於て幾多の宗教書類を繙きたりと雖、割合に腦裡に印するもの少きこと也、其三年間の研究と雖、固より形式的に祖訓聖教の文句を暗んせしに過ぎずと雖、現時幸に大悲の慈愛を仰ぐに至りて一々皆無限の光明溢れ來らずんばならず、然れども當時以爲らく香月院の學風は訓詁解釋に過ぎずして煩瑣其繁に堪へずと、殊に信仰を實驗するに及び古來宗學の研究的態度に對して益々慊焉たらざるものあり、此に於て幼時熟讀せし香月院三帖和讃講義の如き他人の手に讓渡されたり、若し當年師の講義を繙讀するにあらずんば今日何ぞ祖訓聖教に於て無限の光明を味ひ出すを得ん、今にして之を想ふ其恩德洵に甚深也、殊に其講義筆記は祖父の手澤にして亡父存命中之を買戻すの志ありき、此に於てや忽ち一種の靈感に促れて旅中其手續を運び、亡父忌日に之を祖父の靈前に供して、遙に香月院師の恩德を感謝し奉れり、嗚呼吾人が冥々の間に佛天の善巧誘引を蒙る洵の此の如く、而して吾人が却て其恩德に背く亦此の如し、記して以て中心の懺悔を表白す、

事蛇蝎に同じ

讃岐高松講習會にある時少女植田某其叔父及姉に伴はれて來り法を求む、曰く四十日前より少女平常好む所を食はず、快々として樂まず、肉瘡せ色青し、乃ち其憂ふる所を質す、彼自己の罪惡の深重なるを感じ、地獄に墮つべきかを憂ふと、年齢を問へは十六歳也といふ、予驚きて詳かに其感想を問ふ、彼曰く、頭上蛇の蟠るが如き感あり、且身自ら蝎たらざるを疑ひ、背部鱗の生ずるかと思ふと、予聞きて益々大に驚く、當時予三信釋を講ず、曰く、外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚假を懷けば也、貪瞋邪偽奸詐白端にして惡性侵め難し、事蛇蝎に同じと、吾人は此文字を讀み毎に頗る適切にして肌骨に砒するが如き感ありと雖未だ身自ら蛇蝎たるを感ずる此少女の如きはあらざりき、予を以て之を見るに確かに此少女は彼三信釋の教訓を體現して予に示したるものにあらざらんや、予は乃ち説きて曰、たとい身は罪惡の一塊にして蛇蝎の如しと雖既に彌陀悲母の攝取の慈懷に抱かるもの、たとひ地獄に墮らんとするも墮つ能はざる也と、佛の慈悲を説くこと三時間、彼怡然として覺むるが如し、是より如來の

大悲に安住すること赤子の母に頼るが如し、數日の講話をききて歡喜すること成人と少しも異らず、今にして初めて知る、彌陀の本願には老少の別なきことを、吾人固より本願に老少善惡の區別なきを知ると雖、丁年未滿未だ人生の風濤の險惡なるを知らざるものは恐くは救濟の眞味を味ふこと難かるべしと、而して是畢竟自己を以て漫に他を臆測するもの、若し宿縁熟し來らば何人か信樂開發の春に遇はざらん、和讃に曰く、
いつしの不思議をとくなかに 佛法不思議にしくぞなき
佛法不思議といふことは 彌陀の弘誓になづけたり

七里恒順師

福岡に在りて大悲を仰ぐこと四晝夜、故七里恒順師の感化は其遺弟に傳はりて稱念佛の聲到る處に響く、將に辭し去らむとするに及びて謹んで師が墓を展す、卵形の小墓石、形、師が父君の墓と同じ、謹みて小經を讀誦し且つ和讃を諷して曰く、

彌陀大悲の誓願の ふかく信ぜんひとはみな
ねてもさめてもへだてなく 南無阿彌陀佛をとなふべし

是師が晩年殊に反覆玩味したまひし讃文にして師が信念を最

もよく述べたるものなるべし、傳聞らく、師が上京せる時一信徒師が寓を訪ふ、師の許を得て室を同じくして宿す、師に問うて曰く、ねてもさめてもへだてなくといふ、寐ぬるの謂か果た横はるの謂かと、師答て曰く寐ぬるの謂なりと、乃問うて曰く寐ぬて猶稱名するを得るか、師曰く然り能く爲し得べしと、問うて曰く如何にして爲し得べきかと、師曰く、秘傳あり、曰く請ふ興り聞くを得べきかと、答て曰く之を授けん、然れども汝先づ寤むるとき稱名し得るか、汝之を爲し得たらんには寐ねて稱名することを教へんと、信徒初めて悟る所あり、乃ち枕を並べて眠る、中夜醒む、師念佛の聲絶ゆるなし、怪みて之を窺ふ、師熟睡の中に在り、一夜を徹して遂に止まず、信徒此身業説法に遇ひて今猶忘るゝ、あたはずと、彼面り之を予に語る、予此和讃を誦すると同時に後藤祐護師が晩年の遺訓の和讃を想起せずんばならず、曰く

極惡深重の衆生は 他の方 便さらになし
ひとへに彌陀を解してぞ 淨土にむまるとのべたまふ
二首の讃文相對して兩師の面目を發揮するものと謂つべし、吾人何等の幸か此の如き二大徳を見聞す、眞個に是れ生ける二種深信の教化を蒙るものと謂つべきか、感謝何ぞ堪へ

ん、南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

他力尊ふや蚊屋の中

福岡教育會に於ける講話は小學教員福江善一郎君をして端なく切實なる求道心を惹起せしめたり、予が出立の前夜夜深に至るまで求め、翌朝出立に蒞みて求め、授業を終へて後久留米に來り求む、日既に暮る、乃ち室を同うして夜中慈悲を説く、曉に至りて歸り、授業を終りて亦久留米に至る、此の如く瀛車にて福岡久留米の間を往復する二回、輾轉號泣して願力の瀛車に乗り得べからざるを歎ず、四更蚊帳の中に端坐して大悲を説く、加賀千代女の歌を引ききて曰く、

一煩惱の蚊は拂へども去らず

一法性の螢は招けども來らず

一さらば扇をすて、一心に他力尊ふや蚊屋の中君忽ち感泣して大悲照護の光明中にあることを喜ぶこと限り、嗚呼盡十方無碍の光明は十方の衆生を攝取したまふ、噫、

無意識の冥合

本年ほど各地高等學校を見舞ひたることなし、金澤高等學

て先づ彼佛天の照護に接せよ、光明は常に諸君の上に在り、吾人計らばざるに佛必ず計らばせたまふ、嗚呼自然法爾なる哉。

自然法爾

黒谷傳に、上人つねに仰せられし御詞として其中に曰く、法爾の道理といふ事あり、ほのをは空にのほり、水はくたりさまにながる、菓子のかなかにすぎ物あり、あまき物あり、これらほみな法爾の道理なり、阿彌陀佛の本願は名號をもて罪惡の衆生をみらびかんとちかひ給ひたればたゞ一向に念佛だにも申せば佛の來迎は法爾の道理にて疑なしと、之を以て見るに聖人が最後の法語たる自然法爾及び義なきを義とすとの教化は先師法然上人の常に仰せられし儘なるを知るべし、聖人九十年の教化圓熟したるの極は即ち先師の法語に一言の私を加へたまはざるなり、仰ぐべきなり。

生育我身大悲母 西方教主彌陀尊

我母郷に在りて我父の逮夜に當りて佛前を掃除す、忽爾として我弟の爲に憂へたまふこと酷だ深し、自ら怪み記して旅

校の釋尊降誕會に出席し、福岡大學内の佛教青年會の發會式に臨み、熊本高等學校佛教青年會の春季講話會に出て、岡山高等學校の信仰座談會に列る、予高等學校に在るの日より青年學生諸君の信仰勃興せんことを望みたる年あり、今や期せずして此等の會を見舞ふを得る所以のもの冥々の間佛天の恵を蒙れるにあらざらんや、而して先づ釋尊降誕會を舉行し、

一步進みて合宿所を設け會の發展を謀る、其歩武を進むるの順序期せずして冥合す、頗る奇異の感なきあたはず、昨年秋季熊本高等學校を見舞へるの日自炊寮新設せられ名けて白水洞といふ、今や一步を進めて俱樂部を新設せられんとするの計畫、過半成れり、而して本年金澤高等學校亦自炊寮新設せらる、是皆吾人か十年已前に踐みたるの道にして無意識の間に其冥合の著しき決して無意味にあらざるを信ず、佛天の冥護此の如く精にして且つ密なるかに驚き且つ感謝せざるべからざる也、此に於てや吾人は猶進みて懺悔告白せざるべからざることあり、吾人は此の如く降誕會を行ひ講習會を起し自炊寮を立て、而して六年にして一大苦悶に陥り、幸に慈悲の佛前に接するを得たり、前車の覆るは後車の戒、冀くは各青年會の諸君信仰問題を根抵とし自己の安立を眼目とし

中の我に寄せらる、慈悲矜哀の情は即ち大悲の御心也、同時に亦東京より書信來る、曰く多年憂鬱に沈み切に道を求めたりし弟、一日忽爾慈光に接して法喜措く所を知らず人生初めて大安慰を得たりと、而して其日は乃ち悲母の憂へたまひし同日にして亦恰も弟の誕生日にてありき、大慈大悲本誓願、愍念衆生如一子、嗚呼佛陀無限の大悲はかくも甚深の哀愍を賜ひ、清淨の大攝受を被る、洵に悲喜の涙に堪へざる也。

不請而來、無問而吐

予京都求道會に來る、嘗て學舎に道を求められし杉崎君來り訪はる、君は融通念佛宗の人、曰く、宗祖が二十四年常坐三昧の末、明に如來に面授を得て融通念佛こそ速疾往生の勝因なりと示誨したまひたることを形容詞もて、不請而來、無問而吐とあるは單に冷かなる形容詞として見ることは到底不能也、ぞ絶対の慈光と打喜び申候、其夜君及び無漏田君子と共に宿を同ふす、予信仰を説きて人生に及ぶ、共に佛智不可思議の深廣なるを仰歎すること限なし、君等請はずして來り、我問ふ無くして吐くものか。

住蓮房の墓

昨夏江州馬淵の人牧田氏入信歡喜の餘、東京に來り訪はる、其因縁により氏の未だ歸國せざる頃予四國に往くの途次私かに住蓮房の墓に詣つ、遂に本年は牧田氏の切なる求に應じ同地に法を説く、我母亦予に會はんとて來らる、乃ち共に住蓮安樂の墓に詣つ、母、潜然として、涕泣して曰く、このゆふ人が、御座つたから我等安す、この難有い法が頂けるなりと、傳に曰く法然上人のたまはく、われたとひ死罪におこなはるともこの事いはずはあるべからずと、至誠のいふもとも切なり、見たてまつる人みな涙をぞおとしける、又讃岐鹽飽の島につきたまひし時、上人念佛往生の道こまやかにさづけ給ひけり、なかに不輕大士杖木瓦石をしのひて四衆の縁をむすび給しがごとく、いかなるはかり事をめぐらしても、人をすゝめて念佛せしめたまへ、あへて人のためには待ぬぞと、かへす

／＼附屬したまひけり。

堀の内、金谷

流車堀の内を過ぐ、石に刻して曰く圓光大師初めて説法の

講話

到彼岸

(求道學舎日曜講話)

近角 常 觀

今日の題は到彼岸と致しました、到彼岸とは彼の岸に到るといふ意味であります。只今は御存知の通り彼岸會である、我國に於ては古來より春秋二季に此の彼岸會を修行する慣例であります。今日は之に因みて到彼岸の眞意を御話致さうと思ひます。

第二に此の彼岸會といふ事はいつの時代から初まつたかと考へて見るに、私には深き歴史上の事は解からぬが、餘程古くからの事らしい。鎌倉時代に書かれた書物の中には、是は嘗て南條博士の調べられた所であるが、支那から來た人の言だとして、此の春秋二季に彼岸會を修する事は唯日本のみで、支那にも印度にも無い習はしであると書いてある。之で見ると我國に於ては餘程古き事である、而も我が國獨特の佛事のやうに見えます。其處で一體何時代から始まつたかと考へるに、之は唯單に想像に過ぎ無いのであるが、何うも奈良朝より存して居つた事はたしからしいのである。私は或は聖德太子の御時より始まつたではないかと思ふのであります。其譯は聖德太子の傳を拜讀すると御一代の中に此の類の事柄

所と、蓋し法然上人舊師皇圓阿闍梨の櫻が池に棲みて慈尊出世の曉を待ちたまふを悲み、願彼佛願故の文心魂に徹して本願を見出したまひしの後、親しく訪ひて之を説きたまひしの舊蹟たらんか、是釋尊成道の後直に阿羅邏衢多迦を訪ひたまひしが如けんのみ、然れども其御心の舊師に徹せざりしことの如何に悲しく在りましたけん、上人嘆じて宣はく、智恵あるが故に生死のいてがたきを知り、道心あるが故に佛の出世にあはんことを願ふと、金谷に下りて東遠佛教會に臨む、田中君辨じて曰く予が信念を以て教界に立つに至りし動機は九年前敦賀講習會開會の辭をききたる時に萌芽せりと、嗚呼一言の法も一句の教も皆如來の御教法なり、仰ぎ尊ばずんばあるべからず、嗚呼。

念佛往生はいかにして障を出し難せんといふれども、再生すまじき道理は大方候はぬ也、善根少しと云はんとすれば、一念十念も、事なし、罪障重しと云はんとすれば、十惡五逆も再生を誘ぐ、人を嫌はんと云はんとすれば、常没流轉の凡夫を正しき器とせり、時下れりと云はんとすれば、末法萬年の末元法滅已後盛んなるか、此法はいかに嫌はんとすれども濁るゝ事なし、只力及ばざる事は、惡人をも時をも簡はず攝取し給ふ佛なりと深く惡く我身を願ひず、一筋に佛の大願業力に依て、善惡の凡夫往生を得と信せずして、本願を疑ふばかりこそ、往生には大きなさばりにて候へ。

〔法然上人御消息〕

が澤山に初められてある。一例を擧ぐれば敏達天皇の第七年、太子御年七歳の時に百濟より經論數百卷を献上した。其歲、春二月より太子香を焼て披見し給ふ事日毎に二卷、冬に至つて一遍了ぬ、又奏して曰く、月の八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日は六齋となす、此日は梵天帝釋あま下つて國政を見をなはし給ふ、故に殺生を禁じ給へ、是れ仁の基なり、仁と聖と其心近し、天皇大に悦て勅を天下に下して此日殺生の事を禁せしむとある。是れが六齋日の初めてであります。又夫から後、推古天皇の十四年太子御年三十四歳の御時に元興寺が出来上つた其の時の記にも、夏四月廿六の佛像二軀を造り竟つて元興寺にすえたてまつる、太子儀を備えて迎て先導す、時に佛像金堂の戸より高くして以て堂に納る事を納れ奉らんと、然るに較作、鳥秀いてたる工にして、以て戸を壊らずして堂に入るゝ事を得たり、齋を設けて大に會せり、此夕寺に於て五色の雲あつて佛堂の菟を覆ふ、此夜丈六の佛像光明を放ち給ふ、數度の中に一度は、火の如く内外に映がやく、太子奏して曰く、此年より始めて四月八日七月十五日毎に齋を設けよ、五月に太子奏して佛の工鳥が功を賞して大仁の位並に近江坂田の郡水田廿町を賜ふとある。猶ほ此の如き類例は此の他にもあるのであります。

勿論此等の例があるからとて直に此時を彼岸の初めと云ふ事は出来ぬ、殊に四月八日の如きは釋尊の降誕日であり七月十五日の如きは盂蘭盆日であります。又例へば春秋二季に齋を設くる初は聖德太子であるとしても春秋二季の彼岸に當つて

彼岸會を修する事と決められたも太子であると迄は解からぬのである。去りながら此等の例から押し行けばどうも彼岸の初も聖徳太子であるらしい、よし遅れても聖武天皇の時だらうと私は思ふのであります。

其處で進んで申しますに、彼岸會は斯の如く日本獨特の祭日で有つて、現には國祭の一となり朝廷に於ても此日を以て歷代皇帝の御祭を行はせらるゝ。又家々に於ても各々祖先の祭を營みて其恩徳を回想し法を喜ぶ事になつて居る。此は能く考へて見ると大に意味の存する事と思ひます。

偕て彼岸なる名稱は言ふ迄もなく到彼岸なる文字から來たのである。其の到彼岸はどうかと云ふには諸君も御存知の通り波羅密、所謂六波羅密の波羅密を漢譯したものである。波羅密は譯すれば到彼岸となるのであります。而して之に六つの行があつて所謂六波羅密である、又は之を菩薩六度の行と申します。菩薩六度の行とは菩薩とは今日で云へば求道者である、菩薩は道、薩は薩埵て道を求むるの人、即ち文字通りに言つても求道者である、今斯の如く熱心に法を求めらるゝ諸君が即ち菩薩であつて、其菩薩が行ふ道故菩薩六度の行と申すのであります。次に此六つを一々云ふにも當らぬが第一には即ち布施——人に物を恵む事、第二には即ち持戒——諸の戒律を保つ事、第三には即ち忍辱——能く一切の苦痛を忍ぶ事、第四には即ち精進——能く勉強する事、第五には即ち禪定——心を靜におちつけける事、第六には即ち智慧——能く一切の理義を明らかにする智慧、此の六つである。之は詳しく言へば猶ほ如何程でも云ふ事が出來ます。處て今私の話は此の

る。仍て信仰とはあまり直接で無いが、先づ順序として勝鬘經の文から拜見してゆきませう。

勝鬘經十大受の次ぎに宣はく
世尊我れ今日より乃至菩提に至る迄、正法を攝受して終に忘失せず、何を以ての故に法を忘失する者は、則ち大乘を忘る、大乘を忘るゝ者は即ち波羅密を忘る、波羅密を忘るゝ者は則ち大乘を欲はず、若し菩薩大乘を決定せずは則ち正法を攝する欲を得る事能はず、所樂に従つて入り、永く凡夫地を越るに堪任せじ、

と、之で見れば、正法を信ずる事、即ち波羅密である、猶ほ茲の處で波羅密の下に到彼岸といふ太子の註が入れてあります。さて此より漸々に波羅密を擧げて來て、布施持戒忍辱精進禪定智慧の六波羅密が説いて有る。無論此の六つのみが波羅密ではないが、普通に波羅密と言ふ時は先づ此の六を指す。處で斯くの如く勝鬘經の初めには六波羅密を並べたてゝ、或は正しさを爲せ、或は怒る勿れ等種々誡められてあるが、其結局の最後に至りては何とあるかといふに、曰く、

世尊是の故に異の波羅密もなく、異の攝受正法も無し、攝受正法は即ち是れ波羅密なり
とあります。即ち普通に六波羅密であるが、其結局は攝受正法即正法を信ずる一つであると言ふのである、私は實に茲の處が申したかつたのであります。で普通に六波羅密ではあるが此勝鬘經の上より頂けば其の六波羅密が外では無い、正法を受ける、正法を信ずる一にある。又之を我々より言ふ時は、自分の修行によりて六度の行を行ふ事が主では無く、此の

六度を我々が自己の自力で行つて行かうといふ意味では無い、無論之を真地目に實行する事が出來れば夫は實に結構であるが我々には到底出來ぬ。然らば波羅密即ち到彼岸の結局の意味は何處に有るか、我々の信仰上よりは之を如何に味はふ可きかといふ此の問題に就きてお話を致さうと思ふのであります。

初めに申せし如く、推古天皇の十四年夏四月に元興寺の丈六の佛像が出來上がった。其年の七月に聖徳太子は初めて勝鬘經の講釋をなされたといふ事がある。傳には
秋七月に天皇太子に詔して曰く、諸佛所説の諸經のべ畢りぬ、然るに勝鬘經未だ其説を具にせず、宜く朕が前に於て其義を講説し給ふべしと、太子辭し奏すらく、臣この頃將に疏を製せんとなす、其義理を思ふに適に未だ通達せず、伏して念みれば五六日あつて旬の時に至つて乃ち應に麈尾を握つて師子の座に登るべし、天皇答勅して試み講じ、諸の名僧高德をして其妙義を問はしむ、太子天皇の請を受けて、其の儀僧の如くして三日にして竟ぬ、講竟ぬるの夜蓮花ふる、花の長さ二三尺にして方三四丈の地に溢り、明る且之を奏す、天皇大に奇として車駕して之を見をなはし給ふ、即ち其地に於て誓つて寺堂を立て給ふ云云

とあります、又同天皇の二十五年にも勝鬘經の講釋をなされた。處で其勝鬘經は如何なる御經であるか、又其初めに十大受が有つて其十大受が如何なるものであるかに就きては先日の講話及び前號の「求道」に於て充分に申して置きました。其十大受の次ぎが此の波羅密の教えになつて居るのである。

佛の正法を信ずるといふ點が到彼岸の眞の意味となりませう。以上段々と長い道行で話して來ましたが到彼岸の要點は實に茲にある、我々は此の彼岸會に際して此の佛の正法を喜ぶ事が肝要であります。
猶ほ亦申せば存覺上人の「改邪鈔」中には「二季の彼岸をもて念佛修行の時節と定むるいはれなき事」と云ふ一條が有つて、念佛修行に日を定むるべからず、他力の教は常に喜ぶ法であるから特に彼岸を際立てるは却て法の心に戻るといふ御誡めが有りませう。又「歎異鈔」の十八章には御存知の通り、佛法の方に施入物の多少にしたがひ云云といふ教化があつて、其中に「且つは又壇波羅密の行ともいひつべし、如何にたからものを佛前にもなげ、師匠にもほどこそすとも信心かけなば其詮無し。一紙半錢も佛法の方に入れずとも他力に心をかけ、信心ふかくばそれこそ願の本意にてさふらはめ云云」とも有ります、施入物とは即ち布施で即ち波羅密である、布施も信心深くば善いが、信心が欠くる時は何の詮もない、要するに問題は信の得否であるといふのであります。之等の文によつて見ても彼岸の眞の意味は正法を受ける、正法を信ずる一點にある事は彌々明らかであります。然しながら斯く言へばとて彼岸の儀式を廢せよと言ふのでは無い、之は寧ろ日本佛教の特色として永久に保存して行き度き事で、佛恩を喜ぶ上からは實に此上なき慣例である。私も今日彼岸に臨みて殊に此味を喜び度いと思ふ次第であります。
偕て到彼岸とは初めにも言ふ如く彼岸に至る、此方の岸を去りて彼方の岸に到るといふ意味である。生死の海を渡り

て彼の岸に行くのであります。六度の度の字も矢張り此のわたるの意味である。處て此生死海を渡りて彼の岸に到る上に於て要點は何處に有るか。云ふ迄もなく我々人生を立場とせる者は常に人生の此岸にのみ目が着いて暫時も離れぬのである。然に彼の岸に到るといふは此岸を見捨て去るのであります。凡ての信仰の問頭は皆此の點にある、生死の此岸を去りて安養の彼の岸に到る、是が要點であります、殊に絶對他力の上では此點が特に著しいのである、彼岸とは即ち佛陀の世界、佛陀の境界である、我々の方は凡夫の迷界苦の世界である。然るに今は佛陀の御恵み一つで此の迷ひ岸を離れ、彼の安養の岸に行かせて貰ふ事が出来るのであります。度々言ふが龍樹菩薩の『易行品』には「彼の八道の船に乗じて、能く難度海を度す」とある。八道の船とは即ち八正道の意味で、一言に申せば佛の恵みである、其み恵みの船に乗りて生死海を渡り彼方の岸に行かせて貰ふといふのである。又親鸞聖人は『教行信證』の劈頭に宣はく

ひそかにもみれば難思の弘誓は難度海を度する大船、

無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり云云、

是又彌陀の本願が此苦海を渡し給ふ唯一の船である事を示されたものであります。實際我々が此の人生より向ふの岸に渡る上に於て、我々が微細なる布施や持戒や乃至少々の自力善根は何等の力も與ふるものには無い。唯茲に之を哀んで被下る佛陀が居て下さる、其佛の御恵み、其佛の本願のみ船の御力で彼岸に渡らせて貰ふ此外に我々の助かる道は一も無いのです。此點になつて到彼岸の語は彌々深き佛の御力を現は

へきてある。偕て斯の如く色々苦しんだ上て、六度を完うする事出来れば實に結構であるが、我々は殆んど一時一刻も此心を維持する事難いのである。我々の眞に彼岸に到達するには決して我々の斯く行ふといふ其行の力が間に合ふのではない、抑々間に合はせようとするのは大なる驕慢であります。然るに此人生に昔より佛陀が居て下された、佛陀の恵み、佛陀の呼聲、佛の本願は其我々の上に注がれて有つたのである。其み力によりて今度は渡れぬ我々も渡らせて貰ふ事が出来る、實に難有き法であります。若し人生に此の恵みがかつたならば、我々は永久に生死海中に惑溺するより外は有るまい、例へ如何に苦しくても足を措く可き地盤は無いのである。然るに幸にも我々此の生死海中に何よりも確かなる足場を得る事が出来た。佛陀の恵み佛陀の本願是れ實に我々が最後の足場で有ります。

猶ほ解かり易く申しませう。我々人間の互々の心中に日夜に起る妄念は、實に波高く風荒き有様である。昨朝は俄かに非常の暴風雨でありました。和讃には

濁世の起惡造罪は、暴風駛雨にことならず、

諸佛これ等をあはれみて、すゝめて念佛せしめけり。

とある。我々が俄かに苦しむ有様は了度雨の如く風の如く有る。之が生死海の實相であります。生死海として自分には解らぬが、此の日常生活が生死海であるさうである、そんな事ではいけない。心中に忽然として一點の雲起れば見る／＼心中が一面の眞暗闇となつて仕舞ふ。現に是れ貪欲の波は逆だち、瞋恚の焰は燃えて居るのは無いか。生死海と

して来る。て今の六度にしても八正道にしても普通の意味では自分の實行力修行力で彼岸に渡らんとするものである。然るに此の佛の願力によりて彼岸に到るといふは、即ち和讃の

彌陀觀音大勢至、

大願の船に乗じてぞ、

生死のうみに浮みつゝ、有情をよばふてのせたまふ。

の意味であります。人生苦惱の海は到底我々の自力小善を以て渡る事は出来無い、然るに慶ばしくも其我々の爲めに大願の救の船が眼の前にある、我々は唯其船に乗る計りである、乗れば直ちに苦海を脱れて彼岸に到らせて貰へるのであります。佛陀の境界と我々の境界とは實に遠く隔たつてある、而して本來は之を渡すべき六度の行も我々に於ては行ふことが出来ぬ、唯世に眞に我を恵むて下さる佛陀の御力はれ一つが人生の船である、我等を救ふ力であります。

他力の信仰を平日聞き慣れて居る人は、本願といひ或は名號ときいても左程に感じ無い、平日あまり充分に聴き過ぎて居る故此の深き佛の願力が今は一向心に響ひかぬのである、是は我々の大に注意を用する點だらうと思ひます。又迷と言つても遠い處に有るのではない、我々の日常の生活が凡て皆迷である、或は欲を起し、或は名譽を慕ひ、或は成功に苦む等は皆生死海中に人生的物質的に苦しんで居る姿である。生死海と言へばとて何も我々の平日己外に有るのでは無い、平日の生活即ち生死海であります。而して若し此生死海を我々の自力で渡らねばならぬ時は、即ち今言ふ如く種々に善を修する事が必用である、或は戒も持たねばならぬ、懈怠の者は精進しなければならぬ、散亂心の者は心を一にして禪定を行す

いつて別に此外には無い、我々が今現に其生死海中におち入つて居るのであります。然らば又斯の如く妄念に狂はされて居る時丈が生死海かといふにどうも無い、今斯の如く苦む所以のもの即ち平日の生活が其基と爲て居るのである。我々が平日身口意の三業に修する所は何であるか、利益でなくば名利の爲である、之は各自に考ふればすぐ解かる事でありませう。而して平日は此の貪欲心が都合なく流れて居るもの故に自分には此の事を自覺し無い、去りながら一朝此上に一點の障礙が来れば忽ち之が爆發して愛憎の風波が逆か巻く事になるのである、故に平日の生活が直ちに是れ生死海なのであります。

偕て我々は斯の如き生死の苦海中に在つて日夜に互に争ひ互に相へたて、居つて、内外に一點の頼む可き處が無い。茲に於てか何とかして一の頼むべき船を見つけねばならぬのである、是れが抑も到彼岸の初めて有ります。即ち其船の一は布施である、忍辱である、精進である、行を正しくするも夫てあれは、智慧を磨くも夫である、六度一々皆此の船であります。併しながら我々は此の腹の立つ心中で慈悲を行ふ事が出来るかどうか、設い出来たとしても後に思へば名利の心から一寸思ひついた位の事に過ぎぬ、而かも人に施した裏には直ちに名譽といふ返報を豫期して居るのである。斯の如く偶々一方に善を行つてもすぐ其裏から之をこはして居るのが我々の有様であります。故に今云ふ如き各の船を目分て造つて、其の船によつて生死海を渡るやうの事は到底出来ぬ、自力が駄目だといふは之であります。其處で人生唯一の船は何て

あるか、今申す如く怨みに報ゆるに怨を以てし、怒りに答ふるに怒を以てし、互に相ひ争つて居る此人生に、真に我が安んずる場所があれば此程満足の事は無いのである。然るに六度既に吾々に安心を興へ無い已上、人生如何なるものも我々が真に據る可き力とはならぬのであります。佛の本願、佛の力と聞けば我々は何か遠く離れた神祕の事のやうに思ふ故いかぬ、本願力は我々の如き現に生死海中に苦しみ悶えつゝある者を救ひ惠んで下さる慈悲の事實である。我々如き人生の何れにも行く事の出来ぬ人間に對し、佛は大いなる恵みの心を以て向つて下さる、其御恵みの切なる佛の大御心が即ち本願である。我々は此の本願を外にしては人生に一點の據所も無い、茲が要點であります。即ち人生の生死海に沈淪せる我々が、息かふ可く休む可き力は唯、此佛あるのみである。彼の阿闍世王が過去の罪過に責められて悶絶狂亂せる時、先きに我が子の爲めに殺された父頻婆娑羅王が空中に在りて言はれた所も茲である。曰く、「佛世尊を除きて餘は能く救ふ事無けん」と、實に此世に我々の安んずべき力は唯佛有るのみであります。其處で問題は其佛とは如何なる方かといふ事になります。處が既に斯く佛陀の如何なる方かを考へるやうては佛は容易に解かつて下さらぬのであります。抑々佛陀とは我々如き現に生死の苦海に苦める者を惠んで下さる御方が佛陀である、其苦しめる我々に對し必ず助けんと切なる願心を起して下された方が佛陀であります。本願の船と言ふ時は言葉が譬へになつて或は直接に感じ難いかも知れぬ。此の苦惱の人生に於て、人情の風波にもまれ世路の風波に苦し

める間に於て、唯獨り我を救ひ給はるが佛の大悲である、佛の本願である。願力といひ慈悲といふは何かといふに、斯く苦める我々を惠み、忘れず、惡あれば惡ある程之に哀みを注ぎ、之を救ひ、之を迎え、飽迄安穩ならしめんといふ佛の御親心であります。

偕て其處で我々は人生に於て如何にするかといふに、唯此の本願の船に乗る外は無ないのであります。去りながら本願の船に乗るといつて此の世で直ぐに佛陀になるのでは無い、此世では此船で生死海をば渡らせて貰ふのである。而して生死海を渡つて彼の岸に到つた上て初めて佛と爲る事が出来るのであります。彼の岸とは即ち佛陀の境である、其佛陀の境に到る爲めに此世で本願の船に乗るのである「歎異鈔」の第拾五章には茲の味が明かに示されてあります。曰く、

おぼよそ今生に於ては煩惱惡障を斷ぜんこときはめてありがたきあひだ、眞言法華を行する淨侶なを以て順次生のさとりをいのる、如何にいはんや戒行慧解（六度である）ともになしといへども彌陀の願船に乗じて生死の苦海を渡り報土の岸につきぬるものならば煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月速に現はれて十方の无碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそさとりにてはさふらへ、云々

即ち彌々人生の生死海を了へて報土の岸に着きぬる時、初めて煩惱の雲散し、法性の覺月顯はれて盡十方无碍光に一味となり、佛陀と一致する事が出来るのである、此の時が始めて悟の時であります。て此の彼岸に致らしむべく茲に本願が有

るのである、名號が存するのである、我々は此本願の船に乗るに彼の岸に行かせて貰ふのである、茲が他力信仰の難有き點であります。

故に我々が信仰に入つたからとて煩惱が無くなるか、又は悟れるとか言ふものは無い、唯此の本願の船に乗らせて貰つた味が即ち信仰なのであります。而して此本願の船に乗るには本願の船自身を喜ばねばならぬのである、我々が水に溺れんとする時、心中に如何に能く船を考へ船を豫想し、之に向つて泣き叫べんた處が、實際に船が無くば何の益にもならぬ、設ひ茲に船が有れば善いと思ふたにしろも思ふただけでは何の効も無いのである、我々が佛陀に對するもまたさうである、唯佛陀を思ひ、考へ、呼び叫んで居る丈けては駄目であります。然らば如何に佛陀に安んずるのであるが、外ではない、私が度々お話しする

無明長夜の燈炬なり 智眼くらしとかなしむな、
生死大海の船筏なり 罪障ちもしとなげかざれ。

の和讃の味であります。茲の處は信仰上願る大切の點であるから特に諸君の御注意を願ひ度い、今日信仰を求めらるゝ多くの方は、自らは今生死海に浮沈しつゝあるのである、誰れか自分を救ひ呉るゝものなきや」と、聲の限りに呼び叫んで居らるゝ有様であります。其の如何にも切なる御情は實に同情に耐えませぬ、之に對して「生死大海の船筏なり、罪障重しとなげかざれ」と、佛の方より我々を呼び求めて、被下るのである、我より呼び求むるのではない呼び聲は佛陀の方に有るのであります。我々は現に是れ罪惡生死の海に浮沈しつ

右にも左にも行方の無い者である、爾るに佛は斯の如き我なればこそ之を惠んで下さるのである。我々は互に相争ひ相害つて苦しんで居る、爾るに佛はかるが故に我を哀れんで下さるのであります。

生死の苦海ほとりなし、ひさしくしづめるわれらをは、彌陀弘誓のふぬのみぞ、のせてかならずわたしける。

我々は曠劫已來今日迄一日の休みなく生死の大海に迷ひて來た、斯の如き我々を助け給ふは唯彌陀弘誓のみ船の有る斗りである。而して彌陀の弘誓は此の海中に沈める者、誰彼れの差別は無い、五乘齊入の本願で善人も惡人も皆等しく攝取して下さる、否惡人なれば惡人程彌々御哀れみも一層深いのであります。斯の如く人生の何處に向つても一點の光なき我々に對して、唯佛陀は一筋に此者をいつまでも惠んで下さる、茲が實に信仰の要所である、「生死大海の船筏なり」といふは此處であります。而して一度此船に乗つて見れば、人生唯佛の御恵み是れ一つとなるのである。去りながら何でもかても喜びが出たのが信仰かと云ふにさうは言へぬ、人生より救ふて頂く畢の出來る一つであります。今此の生死の大海は曠劫已來の大海で縦にも横にも限りが無い、併しながら如何なる大海でも船に乗つた已上は人生此程手丈夫の事はないのであります。處が前にも言ふ如くで自分で作り出した船ではいけな、現在實際に船がある、而して今現に其船が我々の前に我々を待ち設けつゝあるのである。船と云へば形容にすぐるかも知れぬが、此の廣き大海中に於て飽迄我を捨てず我を惠みて下さる大悲の親心が即ち船である。而して此淺間しき我等

の爲めに佛は其處迄恵みて下されたか、實に難有いと一念氣が着いた時が其船に乗つた時であります。信仰を得る、船に乗ると申せば大層六かしくなるが、他力の味は此の外にない、此の一點佛の御慈悲に氣づいた時が即ち信樂開發の一念なのであります。

偕て斯く一念、佛の御恵みに氣が着いた上は何うであるか。矢張り海はもとの儘にして少しも前と異なる所は無いが、身は既に本願の船に乗つたのである、たとひ生死の風波は如何に揺れやうとも、揺られながらも、少しも恐るゝ所は無くなるのです。度々申す御文であるが親鸞聖人は宜しく、大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風靜かに、象禍の波轉ず、即ち無明の闇を破り、速に無量光明

土に到り大般涅槃を證し、普賢の徳に遵ふ也
と、茲の味が信仰已前と大に違ふ處であります。無論信仰に入つたからとて人生の風波が収まる譯では無い、併しながら其の苦惱の人生が今は其儘光明の廣海と化するののである。人生遂に満足を得べからずと思ひしは實に信仰已前の事、如來の願船に乗じて人生を顧みる時は人生は決して苦惱の人生ではなくて光明の廣海である、暴風驟雨は變じて至徳の風和ぎ衆禍の波轉する有様であります。其の具合は丁度昨朝の天氣の雨收りて天晴れたやうである、茲は實に信仰の要點であります。

猶ほ繰り反して申しますが、此人生は人を相手にして安んぜんとし、又は自己の自力で安心せんと爲て居つては何時迄待つても駄目てあります。斯く云へば甚だ邪見のやうであるが此世から守護して下さるといふのである、此は此世で受ける幸福であります。我々が針金を渡るが如き危うき現世の日暮の上に、荷も諸佛が護念して下さる、此れ程力強き事はありませぬ。

親鸞聖人の御一代は即ち此の御恵みの一代であります。聖人が九拾年の御一生之れを歴史上より仰ぐも信仰上より仰ぐも、聖人は全く此御恵みを以て終始してお出になる、例へば御流罪の如きにしてもさうであります。聖人の御傳を拜見するに實際は此時死罪に定まつて居つたと謂ふ事である、然るに其死罪が止まつて越後へ流罪となつた。聖人にしては或は死罪も流罪も同じであつたかも知れぬ、去りながら我々よりいふ時は若し此時死罪になつて居つたら、今日斯の如き貴き法を聞く事は出来なかつたのである。小事の如くにして中々大事であります。又此の時聖人は何と仰せられたかといふに「大師聖人若し流刑に處せられ給はずば、我又配所に赴かんや若し我れ配所に赴かずんば、何によつてか邊鄙の群類を化せん、是なほ師教の恩致なり」、邊鄙の群類に傳道の出来たはく流罪の御蔭である、之れ一に師匠法然上人の御恩であらるとお喜びなされてある。之を觀ても聖人が、我が一代は全く諸佛護念の御力で行けるのである、といふ御喜びの様は見えるのであります。そうして其の極に到つては「化身土卷」に於て、日月二十八宿を初めとして四洲、四天、三十三天乃至天神地祇悉く信佛の人を護持養育して下さると迄お慶びなされてあります、斯の如く一度び如來の願船に乗り込ませて頂いた上は此世に在る間も極めて平安歡喜の生活を樂しませて貰ふ

が今の六度でもさうである。六度は一々皆善根には相違ないが、之を行はんとするは即ち自分の力、自分の慈悲心で押し通うさうとするのである、悪くは無いが自分を相手に爲て居る故終には疲れて倒れるのであります。安心問題に於ては必ず、自分の力を眺めてはならぬ、又人を見ても可かぬのである、唯仰ぐところは佛陀ばかり、親鸞聖人や古來の聖者方が彌陀の願船と仰せられたは決して無意味な事を教えられたのでは無い、我々は昔より廣大なる御恵を事實に受けて居ながら之に氣づかず、勝手に苦しんで居るのである。一度び之に氣着かせて貰へば今迄の煩悶も皆夢の如くに消えて仕舞ふ、吳々も此の御恵みの難有きに氣づかせて貰はねばならぬ。而して一度び大願の船に乗り込んだ上は人生の風波も煩ひとするに足らぬ、波高ければ高きにつけ、風暴ければ暴きにつけ彌々佛陀の御恵を仰ぎて此の廣大なる願船の御力を喜ばせて貰ふ計りである。すると忽ち人世の風波も又いつの間にか自然にをさまつて景色よき人生が來り、漣の立つ如き平和の境も現前するのであります。度々申す和讃であるが、聖人は亦のたまはく

大願海のうちに、智恵の波こそなかりけれ、弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり。

此も亦本願の船に乗せて頂いた味を御示し下されたものであります。既に人生に此の大悲がある上は、我々は何事はない此大悲に御任せするのみである。猶ほ此の本願の船に乗せて頂いた身は此世に在りながら諸佛の護念證誠の幸福を受けるのであります。諸佛の護念證誠と謂ふは、信心の人は諸佛

事が出来るのであります。處て茲に一つ注意すべき點がある、夫れは聖人は斯の如く本願の船に乗るとしては仰せられてあるが、去りながら此の世が直ちに淨土であるとは一言も申されてない、此であります。即ち我々は願船に乗つて生死海を渡らせて貰ふのであるが、彌々彼岸に到達するは此世を脱れて佛の御國に生るゝ其時である、御國に生るゝ夫迄は即ち此世に在る間は彌々本願の船に乗りて生死海を渡りつゝあるのであります。故に到彼岸とはたゞ一言であるが、此一言は死して彼岸に生るゝ迄は完成する事出来ないのである。然るに我々は死を好むかといふには實に何人も大嫌いなのであります。歎異鈔第九章には宜しく、

いそぎ淨土へ参り度き心の無くて聊か所勞のともあれば、死なんずるやらんと心ぼそく覺ゆることも煩惱の所爲なり、久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里は捨てがたく、未だ生れざる安養の淨土はこひしからず候ことまことに能く、煩惱の興盛に候にこそ、名残り惜しく思へども娑婆の縁盡きて力なくして畢る時彼の土へは参る可きなり云云實に我々はいや／＼ながら娑婆の縁盡きて仕方なく死ぬるのである、去りながら此の死する時初めて彼土へは参る事出来るのであります。

猶ほ此の味は善導大師の二河白道の譬喩の上からも頂く事が出来ます。即ち此方の岸には群賊惡獸が競ひ狂つて居る、又南北には火の河水の河が有つて其の底がわからぬ、火の河といふは我々の煩惱である、水の河といふは我々の貪欲である、

亦南北に走らんとすれば悪獸毒蟲が襲つて来る、如何ともする
とが出来ぬ。唯茲に西に向つて水火の中間に一條の白道が
ある、併し是又水火の二河にせめられて極めて危うい、其處
で此人自ら思念するに「今歸るともまた死せん、止るともま
た死せん、行くともまた死せん、一痛として死をまぬかれず、
我此道を尋ねて先きに向ひて而も行かん、既に此道あり、必
ず度すべし」と。此の人此の決心を爲したる時忽然東岸上
人ありて呼んで云ふには

きみ唯決定して此の道をたづねて行け、必ず死の難無けん、
若し住せば必ず死せん

と、亦西岸上より聲ありて呼ばうて曰く、

汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん、水火の
二河に墮せん事をおそれざれ

と。我々が人生にありて安心を求むる有様が丁度是てありま
す。或は他人を相手に考へ、或は自分の力を當てにやつて見
ても、遂に一條の活路も無い、然るに幸にも茲に他の教えが
ある。東の岸の人の勧めに従つて我々が此の教えにゆかんと
する時、突然西岸上よりは我を呼び給ふて曰く「汝一心正念
……」と、是れ實に本願のこゝろである、呼聲といひ招喚の
勅命といふ語も茲から出たのであります。今此水火の中に於
て如何に我々が助け船を絶叫するとも、我々の聲は遂に届か
ぬのである、然るに佛の呼び聲は其の哀れなる我々の爲めに
「汝一心正念」と彼方よりして呼びかけて下されたのである。
そうして其の本願の呼聲には何とあるか、

設ひ佛を得んに十方の衆生至心に信樂して我國に生れんと

を喜ぶのである、他力に於て彼岸會を修行するは此の意味に
於てあります。聖人は「歎異鈔」に宣はく「親鸞は父母孝養
の爲めに念佛一邊にても申したる事未だ候はず云云」。我々人
間が如何に供養をしたからとて、我々の力で祖先を彼是する
事が出来るものではない、助けて下さる方は唯彌陀一佛であ
る、假りにも我々が廻向供養など考ふるは實に驕慢の沙汰で
あります。併しながら先きに淨土に往生して盡十方無碍光佛
と一味になつて居らるゝ方々は、此の我々を助けて下さる事
が出来、亦我々も彼土に往生した上に於ては思ふが如く助
け遂ぐる事が出来るのであります。「教行信證」の最後には宣
はく

安樂集にいはいく、眞言をとりあつめて往益を助修せん、い
かんとなれば先きに生ぜんものは後ちを導き、後ちに生ぜ
る者は先きをとりあひ、連續无窮にして願はくは休止せざ
らしめんと欲す、无邊の生死海を盡くさんが爲めの故な
り

と。亦『御臨末之御書』には

我歳きはまりて安養淨土へ還歸すといへども、和歌の浦の
片雄浪のよせかけ、歸らんに同じ、一人居て喜はゞ二人
とおもふべし、二人寄て喜はゞ三人と思ふべし、その一人
は親鸞なり

我なくと法は盡きまじ和歌の浦

あをくさ人のあらんかぎり

とあります。斯の如く先に立てる人々が佛陀の境界より我々
を色々と今日迄導いて下されたのである、我々が彼岸會を營

欲して乃至十念せん、若し生れずば正覺をとらじ
と、是であります。又歎異鈔で頂けば

親鸞は唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしとよき人の仰
せを蒙りて信する外に別の仔細なきなり

此の一句である、念佛して彌陀にたすけられると云ふは即ち
本願である其本願の通り申された法然上人の仰せてありま
す。而して此の仰せを蒙りて信する外に別の仔細なきなり
と唯本願其儘に御受けなされて御喜びなされたが聖人の信仰
であります。我々も又斯の如く此仰せを唯其儘に頂けば夫れ
てよいのである。而して此の御恵みの御力を頼みに白道を進
ませて貰へば、設へ火の河水の河は互に此道を焼くことある
とも遂には彼岸に達して善友相ひ見て慶樂する幸福を得る事
が出来るのである。云ふ迄もなく東の岸は娑婆世界の事で西
の岸といふは極樂淨土であります。

偕て已上に於て到彼岸の眞實の味は大略お話致しました。

猶ほ亦此の彼岸會を修行する上に於ても一言申して置き度い
と思ひます。御存知の如く我國に於ては彼岸になれば如何な
る家でも夫々の準備を設けて祖先の靈を祭る習慣である、之
は我が國固有の習はしとして大に結構の事と考へます。然し
ながら此につけても矢張り自力と他力とで幾分意味の相違が
出て来るのである、若し普通に曰ふ時は斯の如くして我々の
方より先だてる人々の爲めに廻向をする供養をするといふ意
味だらうと思ひます。けれども我々他力の上より言ふ時は
さうではない、斯くの如くして先きに淨土に行ける、達の御
恩を喜ぶのである、又即て我々も淨土に生るゝ事の出来るの

むは此の意味に於て祖先の洪恩を謝するのであります

勸 僧

僧家は常に自ら念ずべし、我れ出家の人となつて生死を了了
了、乃し本分の事此の如くなること能はずして俗塵に汨没す、
一日大限到り來らば、何の倚り頼る處あらん、平日善業有り
と雖も輪廻を逐ひ、善去ることを免れず、業の報應れば又復墮
す、如かじ早く淨土を修め直に輪廻を脱して、面り彌陀佛を
見奉らんには、方には出家の事華々、永明の壽禪師、長蘆の順
禪師、萬年の一禪師の如き、皆此の道を修す、又釋して以て人
を化して更に相ひ勸化せしむ、豈に彼に効ふ可けんや、凡そ人
に一錢の施一食の供を受けば、皆な當に爲めに淨土を説きて以
て其の徳を報すべし、縦ひ彼信ぜずとも亦之を知らしむれば、
耳根漸く熟して久しうしておのづから信ず、若し或は便ち信ぜ
ば其利益大なり、常に此の如く人を化すれば、現世には則ち人
の爲めに敬せられ、己が善縁愈々見れ純然して能く精心假想、
久しからずして必ず佛の眞身を見る、此報、身盛きて後必ず上
品上生して不退轉地の菩薩となる、古語に云く、此身今世に向
て度せずんば、更に何れの生に向てか此の身を度せん、此の身
まきに常に念すべし、此の意懈怠すべからず。

（龍舒淨土文）

告白

巨萬の富よりも嬉しい

津田 常茂

此度は不思議の御縁により受して、諸君の前に私の領解を披露して頂く事になりました今年の三月始て近角先生に御目に掛りました時、入信の願末を逐一申上げましたが何だか胸一杯になり言葉が前後致しまして要領を得なかつた様で御座いました先生よりは、したゝかに御同情を蒙り求道誌上に於て告白致してはどうか、との御勧めに預りましたが其の時は若や爲めにする所ありて殊勝らしく告白した様に私の信前の状態を知てる人に思はれては却て尊い御教を汚す恐れがあると思ひましたから其通り申上りて時節の来るのを待つこと、致しましたが、それから四月になり五月になり、うちに逢遇する出来事は、一つとして適切なる如來の教訓ならざるなく兎ても、じつと黙つては居られませんか、のみならずこんなつまらぬものでも御読み下さいまして、責てたつた御一人にても、これが縁になりて入信なさるゝ御方があれば、それこそ如來の御冥助に叶ふこと、存じますし、一旦如來の御救済を受けたる以上は眞實の懺悔が書けますが、僞善の人は眞面目の告白が出来る筈はないと観念しましたから謹で如來の御導きを蒙りたる回顧談を述べます。

へ入寺致しまして現に住職を務めて居ります。

父の申すには一旦出家し再び國へ呼戻された時は實に煩悶の極點であつて、幼少の時より聞た信仰は滅茶々に崩れるやら、義理人情の矢丸に攻めらるゝやら殆ど半狂亂の有様は形容のしようが無く死なうかと思ふた事は度々であつたが、其極斯の如き者を救ふて下さる爲めに御成就下された御本願であるゝ其時始めて染々と思ひ付いた、同時に忽ち胸中の迷霧が消へ失せて温き如來の懷に抱かれた心持になり何とも角とも云はれぬ喜びを起した。かく安心した上は再び人生の渦亂に飛込み二度の務めをしても差向へはないと思ふた、けれど一旦出家した事ではあり永く家政に遠ざかつた爲め、却て世の物笑ひたらんも知れず寧ろ僧となり初志を貫き衆生濟度の御手傳ひをなすに如かずとて、私等とも相談の上再び上京を企てました。

私は個様な中で人となりましたから外の宗旨や無宗教の家庭と自分の家庭と比べて見るとあまり風波がはげしいので、眞宗の教は駄目だと思ふた事が深く心底に染み込んで仕舞ひ恐れ多くも佛を不俱哉天の怨敵と怨み奉りました。こんな風で暮すうちに月日は遠慮なく過ぎ行きました私は三十二歳になり始めてこれなれば一生涯苦樂を俱にするに足ると思ふ妻を迎へました。

かく私は實に人生悲惨の極とも申すべき半生を送りました、一々數へ盡されませぬ自暴自棄放蕩無頼豪慢不遜斯の如くにして眞人牛に一縷の信用を繋ぎ來りしは不審でありませぬ、つまり私は所謂才氣縦横と云ふ方でありましたから、こん

そこで私の信仰を申述るには勢ひ父の信仰に入りたる経過を説かねばなりません、それは、こうです。私は明治二年南信州の山の中で生れまして家には土地相應の財産がありました。

十六七歳になりますと一族間に於て私の妻を定て置きたいと言ふので嫁の候補者撰定談が始りました。すると祖母と父母と意見が合はぬのが原因となり、それに尾鱗が、ついで一族間に聞くに忍びざる紛争が起りました、それが何年も續きましたので自然家業は怠り勝ちになる、そんな時には運悪く不景況が續くと云た様な始末で家産が次第に傾いて來ました。

父は其頃に絶へず少々精神に異常を來たしました。或時父は所用の爲め是非上京せねばならぬので相談の上私を附添へといひ上京しましたが、滞京中とらゝ私の隙を狙ひ或夜一人忍び出て、何處へか失踪しました夜が明けて少し立つと横濱から電報が來まして京都へ落ちたと云ふ事が分かりました。

そこで私は國へ歸り手を謹して父を呼び戻したけれど其時は既に剃髮染衣の姿となつて居りました、ちつとも家政の爲にはなりません唯々佛書ばかり見て居りました。母は、それが第一の心配で其外祖母との折合ひやら財政の事やら何やら角やらが原て病の床に付き、一年立たぬうちに不歸の客となりました、祖母は又中風症に罹り三年計りわづらつて居てなくなりました。

すると父は再び京都へ参りましたして高倉大學へ入學し數年間宗乘を講究しまして或人の紹介にて伏見の正樂寺と申す草庵

な我儘放埒を極めて居りましたも尻尾を見せずに、やつて來たのです

しかし大厦の將に倒れんとする一本の支ゆべきに非ず負債は嵩みて山を成し遂に國に居られなくなつて仕舞まして逃げやうにして東京へ移住しましたのは三十五年四月の事に御座います。其頃は私を頭に六名の同胞が、ありましたが其れは皆散々になりました、東京へ出て長家住居をして居るうちに或用向きで三十七年北海道へ参りました栗山と申處の村田某と知り合になり其人より「求道」を拜借して讀みましたのが御縁の始めになり、遂に正定不退の安心を與へて貰ひました誠に、難有次第で御座います、此事を始めて父に告げました、時に父はこう言ひました、巨萬の黄金を土産に持て來たより嬉しいよと。

長くはなりませんが此の悲劇のうちに於ける私の精神的状態は如何であつたかと言ふ事を聞て頂きたいので御座います、前にも述べました通り、佛法の様なもののが此世に無かつたな却らば父も遁世の心を起すまい母も死ぬまい家庭も亂れまいはと思ひ詰めた限りは、どうしても佛を信する譯には行かぬて恨みとする、けれど何か慰安の道がなければ一日も安住出來ぬ、そこで學理上から研究しようと思ひ、その第一義として解りもせぬくせに、哲學の書物を読みました、一番能く首肯することの出來たのは黒岩先生の天人論でありました、その次に克く胸に落ちたのは友人中村某の禪學談です、三界一切空と言ふこととて其の人のいふには最眞面目に最無意識に嘘と聲を揚げねばならぬ場合には自他の差別は無い、例へば軍人が

突貫する場合凡は霞と降りくるなかを行く時に、心中何者が
ある、生死の間髪を容れず此の時に臨まんか忠孝存せず國家
ある事なし、如此の心的状態を一切空と言ふ、一切空は即ち
佛の境なり然れども是れ小乗の三昧に過ぎず大乘無上の悟道
に至ては吾人の臆測し得る處に非ずとこんな話を折々せられ
て、それもさうかなと胸に落ちました、又或時は物に恐れる
心をなほしたいとちもひ、わざ／＼闇き夜に人の恐るゝ山路
などを辿つて腰を抜かした事もありました、まだ／＼色々澤
山ありましたが一つも満足は出来ぬ、出来ぬ筈です、これは皆
我慢心で御座います己の力によつて眞理を求め得るものなり
とし、學問は最上の眞理を不すものなりと定義したからです、
それだから片端から破れて仕舞ました、よしんばその通りに
しても人を恨み世を恨むるような曲つた根性で最上の眞理が
解かるものでない、一切の功名心を捨て、眞理のありかを求
めねばならぬが、その様な事が出来ましようか、私はどうして
も出来ませぬ、

幾度か思ひ定めてかはらん
頼むまじきは吾が心かな

是が私の精神状態でありました

然るに難有い事には先年北海道に於て雜誌求道五六部を拜
讀し二三言御法話を承りたのが御縁の始めとなり、歸路青森
に一泊しぶらりと遊びに出掛けましたが一向氣が乗りません
で俥にて旅館へ歸る、みちすがら尊き如來の御呼聲に忽ち夢
の覺めたる如く、左也々々吾誤れり吾身は是現に罪惡生死の
凡夫曠劫より此ため常に没し常に流轉し出離の縁ある事なし

切に思詰めたる極には必ず吾心の裡に耳で聞くよりも、より
確に汝一心正念にして直に來れ我能く汝を護らんと慈悲
をこめたる如來の御聲が聞へます、一度その御聲が聞へた限
りは再度もとの迷の心になつて見たいと思つても、なられま
せん自然に如來の御名を唱へる様になりす、そして、地獄
の極樂のと言ふ苦みも望みも、なくなりすして眞實平和の境
に入りす。

うれしさを昔は袖に包みけり

今宵は身にも餘りぬるかな

個様に申し上げたればとて一年中呑氣に暮せるかと申すと、
どうでは御座いませぬ、世人と共に艱難辛苦を嘗めますが
世は吾にのみ此の如く迫害を加ふるかと思ふ事がなくなりま
して吾より一層苦めるものもあらんと忽ち同情の念が起りま
す、それにつけて私は妙な實驗があります御笑ひなさらずに
聞て下さい。

忘れませぬ三十五年の四月一日私が故郷を去る時村端れの
峠にさしかかり故郷の方を顧み嗚呼これが見納めか知らと思
ふ刹那に、それまで何事もなかつた下駄が見事に真中から二
つに割れました、割れる理由が有つたのであらふか、妻は
そんなことを大層氣にする性質でありました、其頃は私も多
少そんな氣がありましたので、それに折が折てありましたか
ら非常に驚きましてこの末どんなに成行くてあらゝ悪い前兆
であるとそのは／＼酷く心配しました矢張りその前兆の如
く夫婦別れねばならかと思ふ様な出来事が惹起するやら、貧
苦にやめらるゝやら、あらゆる艱難に逢遇しました、すると世

と叫びました、それ迄何の事やら解らなんだ御文句が釋然と
して心底に染み渡りました、爾後折があつたら先生に御目に
掛り事の次第を告白しもし尊き御法話を承りもしたと思ひ
まして色々の故障が起りまして望みが叶ひませぬうちに、
一昨年と昨年と韓國へ参りまして仕事をせねばならぬ身の
上と相成りましたが、たへず求道を拜讀致して獨り喜んで居
り、本年三月始めて目的を達した次第で御座いますそれ迄は
一度でも佛敎の會合などには足を運びた事のない私ですが此
度滯京中は暇さへあれば自分は勿論妻をも出席させました。
も再び韓國へ渡りましたから當分先牛にも御目に掛れませぬ
席を同ふする事が出来ません、しかし聖人の御仰には二人し
諸君と居らば三人と思へその一人は親鸞也との御言葉で御座
いますから海山隔て、居りまして賑かて御座います。

尙一言自分の經驗から末信の御方の爲めに御注意申す
學説と言ふ者は其時と處により多少解釋が違ひますが信仰の
味は何年前の人とても何千里離れて居る人とても寸毫も差が
ありません、されば眞實吾は罪惡の塊なり佛の力に據らずん
ば生死を離れ罪障を滅する道なしと自覺し絶對に懺悔せられ
たお方なればよし先方が他宗信者でも一心專念の味は同じ様
に話が合ひます、私が前に述べました如來の御聲に接すると
申す味は末信のお方には解りませぬ、そこが信仰の極致であ
りますからお話の申し様もない、吾身は全く力のない者であ
る克く／＼按ずれば必定无間地獄へ落ちなければならぬ罪人
である、如何にして生きて此世を送るべきか今死すれば如何
なる處へ行くべきか生か死か今のこの有様が地獄であると痛

は何故に吾のみに斯く無情であるかと思ひました、然るに北
海道からの歸り途に青森にて宿善の御催しに預り如來の御本
願に救はれてからも同じ境遇ではありましたが、その苦みの
中からも世の苦めるものを早く如來の慈光に浴せしめたいと
思ひます、それから此度渡韓前先生にも御暇乞を申し上げ、
う二三日て出立と云ふ時本所厩橋手前の電車線路で下駄が二
つに割れました。

よく／＼下駄に運の悪いことでありまして妻は又々心配を
して道中無事で行かるれば善いと申しました、けれど私はこ
う思ふて居りました、如く誘惑さるゝとも如來より賜りたる
信仰は轉倒するものではないとの靈驗を與へて下さるのであ
ると深く御恩の程を感銘しました

韓國へ参りましても立派には、やれる譯ではありませぬ母
國に居ては出来ぬ様を耻かしき商賣をして居りますが、斯く
せねばならぬ約束であると思ひますから以前の様に人をも世
をも恨みませぬ、回顧すれば人間一生の花たる而立の時代に
人生行路の第一歩を踏み違へて己の淺薄なる分別より吾は才
子也智者也と誤認したのが幸が不幸か遂に一毫千里の差を生
じ將に不惑に遠からずして一事の爲すなく碌々人後に彷徨し
て居ります、是皆如來の御計ひ玉ふ所なれば聊か苦痛は感じ
ませぬ。

超世の悲願さししよりわれらは生死の凡夫がは
有漏の穢身はかはらねとこゝろは淨土にすみあそぶ
五濁惡世のわれらこそ金剛の信心はかりにて
ながく生死をすてはてし自然の淨土にいたるなれ

講義

歎異鈔

近角 常觀

第三章(續)

そのゆへは自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたる。ひだ彌陀の本願にあらず、しかれども自力のこゝろをひるがへして他力をたのみたてまつれば眞實報土の往生をとくるなり。

自力作善の人は自己の力て善をなして夫て飽まで光明を認めんとする人である、かく自分に夫だけ力があると考へて居る已上は眞實佛の御恵みの力即ち本願力を認めて居らぬ人である。憍慢と蔽し憍慢のものは以て此法を信すること難し、自分の力て修行が出来るといふ憍慢の頭が高まつて居る間は決して佛智不思議を信することは出来ぬ、さて此佛智不思議を信するといふことは安きやうであるが中々六ヶ布い、淨土門を信する念佛を唱へる、それで他力を信じたのであると云ふ様に考へて居る人が多い、成程形の上より見れば他力を信じたやうに見えるが眞實に他力を信じたとは云へぬ、信樂受持すること難し、難中之難斯に過ぎたるはなしと考へて聖人が力を入れて戒めらるゝのは決して無意味のことでは

せしめんとの大慈悲を以て向ふて下さる、是即ち十九二十の本願のある所以である、若し此本願なかりせば佛智不思議を疑ふものが疑の晴るべき時節がない、權實眞假の判釋といふことは所謂教相廢立とのみ心得て、大悲の佛陀が此方便の願を起したまひたる眞意を見誤りてはならぬ、聖人は末燈鈔に下の如き御教誡がある、

此信を得ることは釋迦彌陀十方諸佛の御方便よりたまはりたるとしるべし、しかれば諸佛の御おしへをせしむることなし、餘の善根を行する人をせしむることなし、この念佛する人々にくみせしむる人をもにくみせしむるべからず、あはれみをなしかなしむこゝろをもつべしとこそ聖人はおほせことありしか、あなかしこく、佛恩のながきことは、憍慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するたも彌陀の御ちかひのなかに第十九第二十の願の御あはれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ

かく自力修善にて他力をたのむこゝろなき疑惑の人をも飽まで信せしめんとの大慈悲心が即十九二十の願である、此願あるが爲に、佛の果遂の御心が届きて遂に疑惑が晴れて佛智不思議を信する様になる、初めは自己の力を頼みて手當り次第に如何なる善をも成し得べしと自負心を起して進みつゝある間に遂に迎も諸善萬行は爲し得べからず、ともかくも佛力に頼るの外なしと考へて氣がつきたるか即ち念佛一行になつた點である、即ち第十九願の人か第二十の願の人となつた次第である、偕たとひ念佛一行になつても上にも言ふた如く佛智不思議の信ぜられぬ間は自力修善たるを免れぬ、自力ながら

ない、たとひ淨土ありと信じ、口に念佛を稱ふると雖若し自己が念佛を稱ふるの功德を以て淨土に往生せんと欲する人ならば、佛の本願の力を信じて居るのではない、寧ろ自己の力を信じて居るのである、善を修すれば福あり罪を犯せば禍ありと考へて居るのである、即ち罪福を信する人である、罪福を信じつゝ念佛を稱ふるものは眞實佛陀絶對の救済を信じて居らぬのである、たとひ淨土を願ふと雖、佛が我等がために成就したまひたる報土たるを信せずして自己が修行の功によりて往生する淨土と考へつゝあるゆへに眞實の淨土を認めることが出来ぬ、故に念佛を稱へながら其心は自力なるが故に他力中の自力である、淨土を願ひつゝも眞實の淨土を見ることが出来ずして自己が見によりて區劃をつけた淨土なるゆへに即ち其力相當の淨土で階級を生ずる化土である、かくの如く念佛を稱へ淨土を願ひながら眞實佛陀の力を信せざるゆへに佛智不思議を信せざる疑惑の善人である、疑惑の行者である、既に佛智不思議を疑惑して眞實の佛陀を信せざる人なれば其結果淨土に往生するも三寶を見聞せざるは自然の理である、夫故疑城胎宮とか七寶の牢獄とか稱せらるゝ譯である、而して自己の力をたのみとする憍慢心より來りたるものなれば邊地僻界と云はるゝ次第である

かくの如く本來佛陀の御力を信せずして自分の力てやり通さんとする様な考の人は彌陀の本願の目當とする所ではない、されどかく自己の憍慢心より佛智不思議を疑ふ人を其儘にしてあきたならば永久疑の晴るべき筈はない、佛陀は佛智不思議を疑ふものに對して猶其疑を翻へして佛智不思議を信

も念佛しつゝある間に遂に果遂の御念力が届きて絶對救済の無限の慈悲を仰ぐこととなる、是二十の願より十八願に轉入したといふものである、これは聖人自身が經驗されたる道行にして現に化巻にも『愚禿釋尊、論主の解義を仰ぎ宗師の勸化に依て、久しく萬行諸善の假門を出で、永く雙樹林下の往生を離れ、善本徳本の眞門に廻入して、偏へに難思往生の心を發しき、然るに今特に方便の眞門を出で、選擇の願海に轉入せり、速に難思往生の心を離れて難思議往生を遂げんと欲す、果遂の誓良に由ある哉』と告白されてある、あゝかくまでの深き佛の御恵あればこそ幸に親鸞は佛智不思議を仰ぎて難思議往生を遂げさして戴くのであるとの喜である、故に次の文に『爰に久しく願海に入て深く佛恩を知れり、至徳を報謝せんが爲に眞宗の簡要を撫ふて恒常に不可思議の徳海を稱念す、彌々これを喜愛し、特にこれを頂戴する也』と申された。

然るに當時同じ法然上人の門下にありながら、聖人の喜ばれた佛智不思議を喜ばずに觀經の定散諸善やら阿彌陀經の善本徳本の念佛を修行して得色ある人々が多かつたのである、即ち西山鎮西の諸派の人々は是である、そこで聖人は深く之を憂ひて『悲哉垢障の凡愚無際より已來助正間難し、定散心雜はるが故に離其期なし、自ら流轉輪廻を度るに微塵劫を超過すれども佛の願力に歸し難く大信海に入り難し、良に傷嗟すべし、悲嘆すべし、凡そ大小の聖人一切の善人本願の嘉號を以て己が善根と爲るが故に信を生ずることあたはず、佛智を了らず、彼因を建立することを了知すること能はざるが故に報土に入ることなし』と申されたのである、聖人の仰せ

らるゝにはかくの如く佛智不思議の如來二種の回向を信ぜずして定散諸善や、善本徳本を力とする人は佛智不思議を疑ふ人である、疑惑和讃に此佛智不思議を疑ふことを戒め、聖徳讚には其佛智不思議の誓願を信ぜしめ、如來二種の回向にすゝめ入れたまひし恩徳を感謝いたされたのである。

しかるに西山鎮西の人々の如き此佛智不思議を信ぜず、定散諸善善本徳本を作さんとする人の爲に十九、二十の本願ある次第にて、其自分の心に從て修善をなすつゝある間に自然に自己の力の不足なることが分かり同時に他力不思議が分かる様になるのである、化巻に定善は觀を示すの縁也、散善は行を顯すの縁也とありて、十三觀三福九品を辿りつゝある間に盡十方無碍の光明に接して罪惡救濟の佛智不思議を信ずるやうになるのである、かく一旦は自力修善で眞實他力をたのみ心のなかつた人でも、遂に自力の心を翻へして絶對の慈悲を仰げば眞實報土の絶對の淨土に往生して永久佛陀無限の慈悲海中に遊ぶことが出来るのである、此處を自力の心をひるがへして他力をたのみたてまつれば眞實報土の往生を遂ぐるなりと云はれた、故に觀經の表面に説てある定散二善は畢竟其自力の心に從て遂に自力を翻さしむるためである、然れども觀經夫自身の眞意は提婆阿闍世の如き惡人韋提提夫人の如き女人か絶對の大慈悲即ち本願によりて救濟せらるゝといふことである、而してこれ即ち惡人正機の本願である、そこで

煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ

はして。眞實報土の因とするとか、佛智の不思議を信ずるを、報土の因としたまへり」と申されたが之である、しかるに此に注意すべきことは惡人正機といふとを力強く言ふために通俗に「如來は惡はありても大事ない」と仰せらるゝといふことをさく、全體大事ないといふとは如何なる意味であるか、惡を如何に行ふてもよろしいと許して與へられたやうの意味に誤解しやうものならば大なる誤である、唯惡を大事ないと云ふて許すといふならば惡をすゝめるやうなものである、惡人正機といふことは惡ければ惡しきだけ益々佛が其惡しきを悲憫したまふ親心の本願を示されたのである、其悲憫したまふ親心を示さず惡人正機を説くことは出來ぬのである、近來動もすれば歎異鈔の行はるゝに從て、あまり罪惡救濟の力強きを杞憂する人もある、決して罪惡救濟を如何に力強く説きても愛ふるには及ばぬ、寧ろ罪惡のみを説きて其救濟の大慈悲を説く力の弱さを愛ふる次第である、我等ごとき煩惱具足の凡夫を悲憫したまふ親心なればこそ我等凡夫が之に安ずることを得るのである、かくの如き大慈悲に對してみれば益々罪深きことを懺悔して此慈悲の力によらずんば生死を出づべからずとの深信も起るのである、唯信鈔に曰く、

たはざらん、ちからつよきひと、さしのうへにありてつなをあるして、このつなにとりつかせて、われさしのうへにのほせんといはんに、ひく人のちからをうたかひて、つなのよはからんことをあやふみて、手をあさへてこれをとらずはさらけさしうへにのほることうべからず、ひとへに

本意惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり、よて善人だにこそ往生すれ、まして惡人はとおほせさふらひき云云

第一章の罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてましますといふ下て述べたるが如く、我等は實に阿闍世同様の極惡最下の衆生である此の如きものに對して極善最上の本願醍醐の妙藥を説きて下さるのである、實に善導の申さるゝ如く「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、中に虚假を懷けば也、貪瞋邪偽奸詐百端にして惡性侵め難し、事蛇蝎に同じ、三業を起すと雖名けて雜毒の善を爲し、亦虚假の行と名づく、眞實の業と名づけざる也」といふが我々の内心の有様である、してみればとても、我等が企つる行にて生死を離るゝことが出來ぬのである、そこで如來一切苦惱の衆生を悲憫したつて不可思議兆載永劫に於て眞實清淨の行をなして諸有ゆる一切煩惱惡業邪智の我等に與へたまふのである、そこで我等は唯自己は煩惱具足と信じて本願力に乗ずるの深信一つである、即ち機法二種の深信これである、信卷引用の諸經禮懺儀に出づる善導大師の懺悔に曰く、

二者深心即是眞實信心、信知自身是具足煩惱、凡夫、善根薄少、流轉三界、不出火宅、今信知彌陀本弘誓及稱名號、下至十聲一聲等、定得往生。

此文其儘が煩惱具足のわれらは生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて願をおこしたまふ本意惡人成佛のためであるとの深信である、其深信が即ち他力をたのみたてまつる惡人最も往生の正因である、和讃に「不思議の誓願あら

そのことばにしたかふて、たなこゝろをのべて、これをとらんにはすなはちのほることをうへし、佛力をうたかひ、願力をたのみさる人は、菩提のさしにのほることかたし、たゝ信心の手をのべて誓願のつなをとるべし、佛力無窮なり、罪障深重の身をおもしとせず、佛智無邊なり、散亂放逸のものをもすつることなし、たゝ信心を要とす、そのほかをはかへりみざるなり、

此法語は願力無窮の和讃の典據にして、いかにも惡人正機の意味がよくあらはれてある、そこで落ちて居つても大事ないてはない、落ちて居るものを救ふ慈悲の綱があるのである、自力作善の人は自己の力で岸に上らんとする人である、即ち佛智不思議の綱を疑ふて執らぬ人である、されど自力の無功なるをさとつて一たび綱を取れば何人でも必ず強き力で岸の上にひきあげらるゝのである、即ちこれ十方衆生の本願である、しかれども本々とも落ちて上り得べからざるものを救はんために下されたる綱である、即ち無有出離之縁の煩惱具足の我等のための本願強力である、これが即ち惡人正機の本願である、既に自ら攀ち上らんとする多少の力と企とを有する人ですら、とても不可能と覺悟して此綱をとれば何人を論ぜず救ひたまふ、まして一步も上ることの出來ぬものは其佛智不思議を信じて綱をとるや否や直ちに救ひ上げらるゝ、そこで「よて善人だにこそ往生すれ、まして惡人はとおほせさふらひき」とある、

おほせられさふらひきとは、歎異鈔の著者即ち如信上人なり、若くは唯圓坊がかく親鸞聖人が仰せられたとの意味と見

てよろしい、されど一本に『おぼせられさよらひきと云云』となつてある本もある、これなれば前九章何れも祖訓其儘を直接談話風に書きて云云の語を結びてあると統一をたもつことになつて大に可しい、其時は仰せられ候ひきまでが皆親鸞聖上の語となる、然らば誰が仰せられたかと云へば先師法然上人が仰せられたことであらう、上に引用した口傳抄同意の文に本願寺の聖人黒谷の先徳より御相承とて如信上人が御授けられていはく、と書き初めてあるに對照して見れば分かる、そして恰も上に黒谷傳中に法然上人の常に仰せられける御詞として自力作善の淨土宗腹にて傳へたるに對して、殊に親鸞聖人は法然上人の眞意を御相承なされたものゆへに、殊にかどをたて、世の人つねに白くとまで之を對比して惡人正機を示されたことと見ることが出来る、聖人が兄弟子として尊敬せられた聖覺法印も唯信鈔に、しかも適切に祖師と同じく惡人正機を力強くのべらるゝは益々同信の御弟子の肝膽相照すところが顯はれて嬉しい、故に御授けられ候ひき云云は法然上人の仰せになる、若し云云なきときは如信上人の言となりて親鸞聖人の仰せとなる、

何にしても此に面白き事實を見ることが出来る、序論に自力律法主義をいづも他力救済主義で打破ることは度々繰返さるゝことを述べたが、即ち「善人なをもて往生を乞ふ、いはんや惡人をや」の一句は黒谷先徳より相承して親鸞聖人は淨土宗の自力修善に對して他力救済を説き、如信上人は又之を親鸞聖人より相承して二十一箇條張文の自力律法に對して他力本願の眞意を説きたまひたものであらう、實に此章は眞宗の眼

嘆
咏

遊
魂
綠
想

左 千 夫

夏山の青葉の住居思ひ居れば山川鳴るが聞えくる
かも

夏山の緑のしげりうらゝかに鳴くは松雀か谷遠に
して

古寺に人は住まへり青葉深き庫裏のあたり米つ
くひゞさや

心あへる友もあらぬか山寺の青葉にこもり茶を樂
まむ

目にして又歎異鈔の眼目である。

現世の過ぐべき様は、念佛の申されんやうに過ぐべし、念佛の妨げになりぬべくは、何なりともよろづを厭ひ捨て是を止むべし、聖りて申されずば要を儲けて申すべし、要を儲けて申されずば聖りて申すべし、住所にて申されずば流行して申すべし、流行して申されずば、家に居て申すべし、自力の衣食にて申されずば、他人に助けられて申すべし、他人に助けられて申されずば、自力の衣食にて申すべし、一人して申されずば同行と共に申すべし、共行して申されずば一人籠居て申すべし、衣食住の三つは、念佛の助業なり、是れ則自身安穩にして、念佛往生を遂げんが爲には、何事も皆念佛の助業なり、三途へ返るべき身をだにも捨てがたければ願ひはぐむぞかし、況して往生程の大事を勤み念佛申さん身をば、いかにもはぐみ助くべし、若し念佛の助業と思はずして身を貪求するは、三惡道の業となる、極樂往生の念佛申さんが爲めに、自身を貪求するは往生の助業となるべきなり

萬事如是

〔法然聖人語燈錄〕

世の並みの人なる吾や事繁く若葉山川家としかね
つ

人皆が高きをめづる富士にだに裾野の湖の若葉を
ぞおもふ

山中の湖のめぐりの冬木原一夜に萌へて緑靡
けり

籠坂ゆ北見おろして日にきららふ三ヶ月の湖の萌黄
せるみゆ

雲霧のたゞよふ原に萌黄さし三ヶ月の湖奥に浮へ
り

墨の色の匂ふ水繪に心動き魂は若葉の山めぐりす
も

短篇四章

甲 之

日も夜もけじめすてに去りぬ。
はてなき闇路を一人たどりて
淋しき夕の風になく。

二

生を求めて死こそ迫り來。
流るる水とどまらず
生死の海にそそぎてどよむ。
めぐみをたまへみ親みほとけ。

三

はかなき此世のおもてを見れば
悲しみ起れいさどほろしけれ。
されど思ひの行くへをたづね
心のうらをかへりみすれば
ここに平和のくにはとこしへ。

四

いつこより來し心の和ぎは。
はて無き思ひの湧き來ぞいのち
安寝しなむよほとけの慈悲に。

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝび逢はんわれならなくに。
いちばつの花咲きいて、我目には今年ばかりの春ゆかんとす。
夕顔の棚つくらんと思へども秋まちがてぬ我いのちかも。
病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも。
『竹の里歌より』

たとへ歌一首

巖 眞

なた持ちて、
折々に、
なたの刃は、
いつもいつも、
なまくらの、
砥石もち、
あはれそのなた、

○自ら嘲る歌

小田つくり、
年まねく、
我病みぬ、
價もて、
ぬりごめの、
うつそみの、
書屋にし、
すむしなす、
田兼男吾は、

遊ぶその兒や、
木きり竹きり、
かけぬものゆゑ、
切れると思へ、
及まくれ知らに
とぐすら知らに
あはれ凡の兒、

稲はみのらず

こゝにありへぬ。

はたいかにせん

食の米買ひつ。

藏なからかむ。

家なからかむ。

こやりもだりて

かくてありへむ。

登嶽詠草

志 都 兒

白雪廻永久爾計奴氏布いたゞきの岩室こもり一夜
寐にけり
岩たゝむ岩むる見れば遠へ世の昔の人のすまゐし
思ほゆ
ころびねの着のみ着のまゝ岩室に顔も洗はず人並
みにして
人の世を遠くさかりて山津美のお鉢めぐりも父母
の爲め
阿米津地の曾久邊の極み見放けつゝ荒磐村に暫し
休らふ
不二が根乃焼砂原に咲く花は里の薊に似て非なり
けり
不盡ヶ根の岩秀岩群のぼり立ち萬代消えぬ雪を食
ひけり
天津女も大山祇も朝宵に常舞ひけらしこれの高嶺
は

紹介

●生死問題

文學士 北村敬巖氏著

現時の青年宗教界に於て本書の著者北村氏が夙に信仰の問題に著目せられし事は吾人の私に尊敬せらるべきであらう。而して今又本書の發刊に接し吾人は増益し其が眞摯手誠の態度に對し感謝の情に堪へず、本書を分つ事十九日其の著者の説法と釋尊の遺法、無條件の愛、救の聲、信仰ある生活と信仰なき生活、人生と宗教、人生と佛性、逆順に處する勇氣、主義より來る力、自信力、自然の趣味と人生の趣味、理想の實現、無限の生命、無我的道徳、厭世觀、苦痛觀、融通無礙、道徳の制裁、靈魂の不滅、釋尊の人格等言々句々凡て實證の叫びなれば是も浮誇炫耀の嫌なく、吾人は過去の時々昔時の滲透たる心的進路に共鳴して暗涙押えがたきものありき、殊に其の一段々々の有力にして一寸の「ゆるみ」なき等吾人は斯の如き境地なる好著の我が佛敎界に出たるを見て實に喜ぶ所なり、敢て本書の讀者諸君に其一讀を勧誘す。(定價參拾五錢、發行所 日本橋區 青野文禮堂)

●歎異鈔講話

文學博士 南條文雄師著

歎異鈔の如何なる聖教なるかは今更之を言ふの要なし。本書は學徳共に一世に師表たる南條博士が、而かも博識篤信一山宗學の泰斗たる故香月院講師の講録を基礎として、之を自家信念の澄照中に融解し最も可憐懇切に講授せられたるものなり。されば其の一々の解釋一々の引文凡て皆な祖訓に照し、典據を正して一言半句の贅語なきは無論の事、平々の間に無限の信念を基え、且々の要に無盡の妙趣を發見すべく、兩師が温乎たる風乎自ら紙背に動搖たるの感あり。尙本書講述の体裁は各條毎に一章を設けて、凡て十九中、初め勸修の九章を以て上編となし、後の體證十章を以て下編に配し更に附録として香月院師の分科を添えられたる世の忠實なる求道者は拜讀の上に於て多大の便益を得るべし。殊に吾人の本書に對して最も感謝に堪へざるは其の飽遠先聖の所説を重んじて温隨精確所謂宗學の軌範を示し給ひたるの點にあり。蓋し「歎異鈔」が信仰上の秘藏なると共に又種々にして意外の誤解に陥り易きは既に世人の知る處況んや近時の如き信仰問題勃興の時機に際しては千人中其人なきを保すべからず、思ふに本書の如き好指南車を得て始めて毫も誤り無きに至らんか。吾人は此際にして本書を發行せしむる原子の勞を多とし、信仰界近時の眞著として之を一般の求道者諸君にすゝむるに躊躇せず。猶ほ印刷は極ほめて鮮明、紙質は亦精良、體裁能く之に叶ふ。(定價參拾五錢、發行所 東京小石川 浩々洞出版部)

編か重ぬる二百五十餘章の多きに達す。仍て茲に一冊となし春の巻と題して世に發せられたるもの即ち是れ本書なり。固より閑筆の事なれば六かしき論學學説の有りには非ず、然れども職務に直接なる資料は無論の事、或は宗教に警告する處あり、俳句を講ずる所あり、或は禁酒を論じ、文學を説じ或は人情を説き、社會を論じ、其他日常百般の問答は殆んど氏が談笑の料たらざるはなく、其雜然として多方面なる所實に本書の特色なりとす。而も之を行はるに氏が獨特の輕妙なる才筆を以てしたれば讀者は不用意の間に釣り込まれ思はず讀するに到る可し、吾人は氏が趣味の饒多なる文章の自在なることには敬服に堪へず。殊に本書の中皮肉的文字に至ては一段の妙を極め、所謂針の先にて胸をえぐる的確筆法遺憾なく成功せるあるを覺ゆ。蓋し教育ある人士が惰閑の具として、最も適當の書たるべく、猶ほ巨細に精讀せば讀者は此の中より幾多不言の教訓を發見するに至るべし。著者の題旨に曰く、若し夫れ本書の内容如何と問ふ者があつたらば、余は之れに向つて平凡無味、毒にもならぬ代りに藥にもならず屑を漉らすの恐れもないが勿論また頭を外す氣遣ひも絶無である、固と是れ閑人の閑筆に成りたる所のもの親友と雖も苟くも忙しいまふことを口にする者は斷じて本書を目に觸るべからず云云。固に曰ふ、本書は非賣品なれども實價四十五錢を添えて、總町區飯田町五ノ三、宮下丸太郎氏方へ申込まれば直ちに送本せらるべし。



●子供ころ

巖谷小波氏著

文壇の子煩悩を以て我れ人共に許されたる例の小波氏が、子供を主人公とする十餘年來の作物の中、新編七篇を選みて一冊としたる家庭小説なり。而して之も亦令息三二氏が今年七歳に滿ちて初めて登校せられたるを記念せんが爲めの子煩悩の所爲なりといふ。今其各篇に就きて概要を一言すれば、第一篇「乳母の家」は廿四年の作某華族の若君が幼にして養子となり、其「ひがみ」より乳母が案に墓ひゆきて毎日學校を欠席するといふ可憐の戀を描き、第二篇「環さん」は是亦同年の作にかゝり、前編を逆に行きて乳母が環さんと別れを惜む情合の濃かさを寫し、第三篇「親ごころ」は卅三年の作にして約八十頁に渡り編中の最長編なり、高利を貸して巨萬の富を作りたりといふ市ヶ谷左内坂上なる某富豪が唯一人の愛戀を失ひて茲に人生の希望を絶たれ其極狂亂におち入りて折角の財産をも散亂し盡くすといふ哀はれる筋にて、一讀恐むべきを忘れて同情の念に耐えざらむ。第四篇「若様」は卅七年の作にて中心は一二の兩編と同じく矢張り若様と乳母との關係、第五篇「見思ひ」は「ホルテンアッパ」の翻譯にして卅六年の作なり、小供の喧嘩に兄を助けて強敵と奮闘する活潑にして而も堅さなき組の兄弟を描出し、第六篇「神童」は「劇」にして昨廿九年中の所作、自己の年輪を記感せる無邪氣なる天才の少年音樂師が惡漢に誘はれながら之を自覺せし可憐の行動を示したるもの、第七篇「子の罪」も同じく翻譯にして昨年中の筆になり卒直なる少年の一言計らずも父が病氣の誘因を爲し、父は死ぬ少年は其罪を思ひて地獄に行くを恐れ、お庭の井戸に身を投ぜんとするに至るといふ荒唐にして、而もいぢらしき一場の悲劇なり。

而して已上七篇若とらん、面白味を有す中にも吾人は最後の二篇に於て特に多大の興趣を感じたるは如何、更に本書を一讀して吾人の感歎に堪へざるはお伽文學を以て名ある著者の今亦小説に於て充分に成功し給へる事是にして著者の才腕吾人は唯々敬服の他を知らざるなり。猶ほ裝釘には充分の意を用ひ各篇毎に趣味ある彩色畫をも挿入したれば家庭の書棚を飾るには頗る適當の品たらんか、可哀ゆき兒女を持ち給へるお父さんお母さん方は小夏具として一本を求められん事をすゝむ。(定價九十錢、發行所 日本橋 博文館)

●丁未課筆

法學博士 小河滋次郎氏著

監獄界の「ワソリター」として小河博士の名は既に世人の熟知せる處なり。本年元旦より氏は毎日課として或は一項又は二項宛の閑筆を試み、時々「監獄協會雜誌」又は「教誨時報」等に分載せらるゝありしが、今や月を閉みする三月、

時報

傳道日記

四月二十一日、日曜講話集鳴教誨を終へ、夕瀛車にて新橋を出立す、箱根の新緑夢寐の間に過ぐ。
二十二日朝米原に着し、井筒屋にて憩ひ、朝餉す、十九年來往復常に過ぐる所、諸の記憶は絲を繰るが如く顯れ來る、坐ろに佛恩の無窮を感ず。
長濱に着し、別院に入り、有志諸氏に會ふ、母郷より來りたまふ、廣間にて講話をなす、卅二年十一月同盟會の時三郡の僧俗に對して演説せし所、當時亡父、伯父、叔父、從弟と共に庭前にて撮影せり、而して皆既に逝きて我獨り存す、茫として夢の如し、靈壽院殿に拜謁す。
馬淵の牧田君來訪せらる、歸路立寄ることを約す、夜、議事堂にて講話す、市民來聽す、是長濱青年會の爲に説く所、村田氏に宿泊す、母公主人篤信の人、款待厚く、開法頗る深し、感に堪へず、教如上入筆證卷祖訓對幅を拜見す、
二十三日、敦賀に到り講話をなし、母を奉じて海濱に遊び、講習會の時父を奉じて上宮に遊び昔を懷ふ。
二十四日、瀛車より杉原の景を眺め、武生にて伊香間君兄弟と會し、大聖寺に下り、腕車を列ねて吉崎に參詣す、恰も能淨院殿參拜せらる、拜謁して談益々深し、夕鹽屋を訪ふ。
二十五日、夜半起き御堂に詣づ、參籠の殿堂に滿つ、佛燈の下に愚禿鈔を閲して曉を待つ、日中後出立して那谷觀音に詣し、山代に宿る。
二十六日、朝母歸郷せらる、大聖寺にて江沼郡同盟會の爲に講話す、恰も淨院院殿通過せらる、迎へ拜謁す、夜丁未義

塾の爲に講話す。

二十七日、松任本誓寺に青年會の爲に講話す、松本白華氏の寺なり、曉鳥君に迎へられ君が寺を訪ふ、母君夫人席を清めて遇せらる夜講話す、金澤高等學校の諸君來り迎へらる、開樂談話共に寢に就く。

二十八日、皆相携へて金澤に赴く、議事堂に往き釋尊降誕會に臨む、今回の行之が爲也大内居士既に在り、滿堂の紳士淑女非常の満足を以て大聖を追懐す、師信仰の過程を述べ、予は自覺と題して時代思想より信仰を説き、大内師花に喩をとりて佛陀の信仰を説かる、夜傳道會の爲に談話會を開く、

二十九日、午前親戚の墓を展し、午後高等女學校に談話す、風尾、河崎教諭は求道會の同朋なり、高等學校諸君と信仰談を爲し昨夜降誕會後靈感に打たれて青年會自炊寮を起すの議成るを聞き、感謝の念禁するあたはず、夜金石に至り青年會の爲に講話す、梅原護師の寺也、師心を盡して款待到らざるなし。

三十日、師、有志、學生諸君と共に金澤に遊び、兼六公園に散歩し茶店に憩ひて師か涅槃經を讀める所感を聴く、高等學校講堂に於て校友會の爲に講話を爲す、信仰の實驗を披瀝す、恰も新法主臺下の富山縣巡教を終へて歸京したまへるに遇ふ、臺下親しく同乗の榮を賜ふ、各驛車窓に拜謁せんとして子來する信徒雲の如し、敬虔の念、親愛の情、覺へず暗涙を催ふし、佛名口に溢る。臺下慈愛の御情け、心を用ゐたまふこと周到、左右の窓を開きて人に見えしめ、流車進行中、賦韻の間に迎ふるの信徒に身を露はして其志を滿たしめたまふ、江州高月驛に辭して夜我家に歸り、母に見え佛に詣づ。

五月一日二日、近隣の僧を請して亡父祥月遺夜を營む、長濱の某氏法を求めたまふ、嘗て父示寂の時の文章縁となりしといふ、此人此日に尋ねたまふ、宿縁ありがたし。

三日、郷里を出立し安藤州一君及び京都、求道會の諸君に迎へれて一泊す、夜武田君を訪ふ。

感想

現代青年の信仰問題

近頃青年諸君は頗る眞面目になつて信仰を求めると云ふ氣風が大に盛んになつたのは頗る喜ぶべきことである、去りながら其信仰状態が何れも絶對の見地に迄往くと云ふことは餘程難かしい、之が爲に多くの人が謂はゞ信仰問題の中途に止つて居る人が多いやうに思はれる、今是等の點に付て青年諸君の爲に御話をして見やうと思ふ。

一、理想と信仰

現代青年の人の心の中に最も著しくある思想は何事に付ても理想と云ふことである、理想と云へばつまり自分が未だ之に達せずして心の中で目當として居る所の完全な標的である、青年諸君は何れも信仰を求むる時には先づ純潔なる行爲、理想的の社會に向て心を向けて往くのである。此事たるや大に喜すべきことであるが、唯だ自分の心に於て潔白な行爲若

四日、大阪より乗船して暮、高松港に着す佛教研究會の諸君に迎へられて可祝旅館に投す、嗚呼昨年夏期講習會に於て十日間晝夜信仰を説く、今年再び來るに及び信仰益々熟し來りて信友滿心の感謝を捧げて迎へらる、相顧みて他語なし、唯佛縁の深厚を嘆ずるのみ、

五日より十四日に至る十日間講習會講話をなす、會場は勝法寺毎日二席となし、前席は現代の信仰問題と題して、第一、理想追求と信仰、第二、自覺問題と信仰、第三、力行主義と信仰、第四、懷疑煩悶と信仰、第五、愛他主義と信仰、第六、社會主義と信仰、第七、主觀主義と信仰、第八、宇宙本體と信仰、第九、人生問題と信仰を辨し、後席は略文類三信釋及び自然法爾章につきて本願他力の眞髓を味ひて親鸞聖人の老境圓滿の法語を讀仰し奉る、其他中學校に師範學校に講話を爲し、女學生徒の爲に講話を爲し、特に昨年已來松島典獄信仰を喜はれ其不在にも拘はらず獄に於て男監女監に教誨を爲し、公會堂に於て演説及講話を爲して慈善事業及信仰問題を振作す、又和合會及本派別院に信仰を説く、高松の地たる民情敦厚にして由來法縁あるの所將來大に信仰起らむかな、十日の講話聖人の高風を仰ぎて得る所多かりき、最後の日建長三年辛亥十月七日南無不可思議光如來慈禿親總と書せる親筆を拜する幸を得たり、高松の地其名の如く、松青く、砂白く、風景絶佳、況んや紫雲の山、栗林の園、講餘園林の間に遊戯せしむ、是亦佛恩の餘德感謝に堪へざるなり、十四日暮舊友久保中學校長を初め佛教研究會及有志諸君の熱心なる見送を受けて高松港を出帆す、夕陽西に沈みて海風面を拂ふ、祖傳獨誦、幼時父母の養育を懐ひ亦日本佛教の將來を想ふ、忽ち心を過去の永劫に走らし、亦當來の樂邦を欣ぶ、夜半岡山京橋に着し、丸山君に迎へられ、一家開樂の中に在り翌朝親友池山榮吉君來り會し、其に後樂園に遊ぶ、越智小林氏亦來り見えらる、午後諸君に送られて九州傳道の途に上る。

くは社會をば理想として求むると云ふことが直に信仰と云ふことは出來ぬのである、信仰と云ふことは此求むるところの理想を絶對の上に於て見出したことである、然るに今日世に信仰と名付けられてある事柄が、唯だ此理想に向つて求めつゝある状態を信仰と名付けて居ることがある、是は決して完全なものではない、是等の心の有様は寧ろ不安の状態、甚しきに至つては不平の状態遂には失望の状態に導くものである、何とならば今日青年の人の心に思ふて居る理想の行爲、若は理想の社會を之を現代に求むるに事實上存在せぬことを發見する、是に於てか却て其理想の高きが爲め社會をば悲觀し、又他人を悪く思ひ、又自己の行ひの理想に達せざるを悲み其極甚しきに至ては一家の不平の心を養成して自己の立場を失ふやうになる、故に信仰と云ふことは、此求むる所の理想が絶對の上に於て満足されることである、言ひ換へれば其求むるものは現代の社會若は人心の上に見出さるゝに非ずして、現に自己を照す佛陀の親に於て満足さるゝのである。

二、信仰と満足

一度び人が信仰に入れば茲に於て満足が來るのである、故

に信仰と云へることは、曾て理想的に人生の上に眺めて不満に思ひしものが悉く絶對の上に於て満足さるゝのである、餘り抽象的であるから何か一の例を以て話して見よう、總て人の心が理想的に傾く時は自己と云ふことを顧みずして徒に他の缺點を眺め、若は之を批評して憂ふると云ふことが多い、多く一家内若くは友人間等に於て心の合はぬが爲に、心中相隔る如きが此實際である、此時は自己の不完全と云ふことは割合に忘れられて居るのである、然るに他と心が隔たり之を怨み種々苦んだ後に、其煩悶が動機となつて之を人生の現實の人の上に於て求むるのが誤りであつて眞に我を憐む慈愛の友或は親は佛であると安心した時に、翻つて見れば自分の人に求めたゞけのことは又我も人に爲すことが出来なかつたのである、其出来ない自分が知らず識らずの間に自分計り善きやうに思ふて、他を悪く思ふたのは大なる誤りであつたと云ふことが發見さるゝのである、茲に於て一念、佛陀の慈愛を見出すと共に抑々自己が他人に向つて之を要求したることの誤りであつたことが分つて、人生に於ての大満足が来るのである。

信仰は斯の如く自己の罪惡を自覺すると同時に、又此罪惡ある者を慈む慈愛の親を自覺するが故に非常なる自信力を生ずるとなる、世の中で普通言ふて居る自信なる者は、唯だ我慢を張つて居る心持で謂はゞ空力味である。空力では味表面は大層強いやうであるけれども其心の底が弱いのである、然るに一度び絶對を信じて其絶對の心に訴へて、自己が斯くあらねばならぬと信じたる事は徹頭徹尾動かすとの出来ない自信力となる、今日の青年の氣風を見るに、名譽を尊ぶといふ意味が頗る誤解されて、甚しきは虚名を尊ぶといふとになりはせぬか、眞の名譽なるものは其實に伴ひたる譽れるべけれど、今日普通の人の目に着けるところは一時世人の喝采を博するとか、若くは評判をさせるとか言へる如き虚名を求むる風が無いとも云へぬ、虚名を求むる者は従つて虚飾するやうになる、虚飾は偽善の端緒である、是等は皆な自信なきより起るとである、自ら絶對の力に誓つて正しいと斯く信ずるならば、たとへ他人の是非の批評の如きは念頭に掛けるには及ばぬのである、全體古の宗教家は其現代の人に容易に理解するとの出来ない行爲に出てたものである、従つて其現代より誤解され迫害され、遂に自分の一身を是が犠牲に捧ぐる迄

三、信仰と謙遜

そこで信仰の状態に入れば人の心に深き謙遜を生ずるのである、と云ふものは一度び佛の慈愛を感じたると同時に、自己の不完全と云ふことに氣が付くのである、之をもつと宗教上の言葉を以て著しく言顯はしたならば佛は慈悲の塊である、而して我は罪惡の塊である、而して此罪惡なる我を佛の親は常に同情を以て眺めらるゝのである、そこで信仰の心持は罪惡の自己の外に他人の如何と云ふことが見えるべき筈なく、佛の恵みの外に世界のことが目につかぬ筈である、故に此佛の恵みに向つて見れば、自己が罪深いと云ふ深き懺悔心を起すのである、故に信仰には深く根ざしたる謙遜の心があつて、深く人が信仰状態に入らぬ迄は如何程自己を卑下して見ても、心の底に自我心が横つて居つて眞の柔順な謙遜な美德は養はれぬのである、故に若し他人に缺點ありとするも、自己に反照して人を恕すると云ふ寛容の美德を生ずるやうになるのである。

四、信仰と自信

に至つたのである、眞に自信だにあらば當時に世人の喝采を博せぬだけ謂はゞ貯金をして置くやうなものである、然るに今日の人が自分のしたゞけの事を世に發表して人の喝采を博せんとするが如きは、自分の積んだゞけの財産を費してしまやうなものである、況んや實際なき虚名を博する如きは、社會に對して名譽の借金をするやうなものである、斯く言へばとて決して主我的の行ひをせよと云ふことには非ず、絶對の力に照らして自信して事を行へと云ふことである、即ち信仰は古人の所謂自ら反つて直からば千萬人と雖ども吾ゆかんと云ふ勇氣を生ずるものである。

五、信仰と實際

信仰なるものは斯の如き謙遜と自信とを以て實際界に活動するものである、近來動もすれば信仰問題が大に誤解されて上に述ぶるが如く佛の光りに接するとか若くは絶對の境界に入るとか云ふもの故に、何か人生實際社會から飛離れてしまつて或は空想に耽り若くは實際人生に應用の出来ない妄想を懐くが如き弊がある、成程信仰といへる現象は常識以上の神秘なる靈的な現象に接することがある、併し是は信仰に入

る一の場合たるに過ぎずして、一度び信仰に入れば其信仰は必ず人生上に活用されべき力となつて現はれねばならぬ、昨年來問題となりたる見神の實驗の如き、青年の中には之を理想として諸種の迷想に耽つた人もあつたやうであるが、決して現實に目に光りを見るときか、不思議の現象に出會ふとか云ふことではない、唯だ心の中に絶對の佛の慈愛が明かに感ぜらるゝなれば宜いのである、其直接なること目に之を視、耳に聽き、身に觸るゝが如き有様なる故に宗教に於ては常に光りを視るとか、聲を聽くとか、冷暖自知觸光柔軟とか云ふのである、而して之も必ずしも或機會に頓に斯くあらねばならぬと云ふのではない、自然々々に絶對に對して疑が無くなれば宜いのである、又無我の愛といふことが頻りに唱へられたが是も何か自己の所有を擧げて人に施さねばならぬと云ふ如き、頗る窮屈な實際界に適用が出来ないやうな意味に解されたやうである、斯の如き無我の愛ならば眞の絶對無我の有様ではない、絶對の無我ならば取るべきに取り與ふべきに與へて、少しも滯ふることなき心の有様にして又行爲の上にも其滯なき状態が現はれねばならぬ、要するに信仰の眞の味ひは一々實際界に適合して活用するゝ力であらねばならぬ。

道德である、然るに此問題に付ても随分誤解がある、今日其生命なき形式の道德を以て人に強いんとする如き習慣の存するは頗る無理なことである、寧ろ信仰に反することである、是等は家庭上の問題に於て屢々見る所である、又もう一つの誤解は信仰に入れば如何様にしても宜きかの如く思ふて放縱散漫に流れ規律ある生活に入ることを忘るゝが如き場合もある、勿論信仰と云ふものは絶對の境に入るものなれど、其絶對の境に入る味ひは相對人生の上に明かに法則となつて現はれねばならぬ筈である。

七、其實例

以上も話した所は餘り抽象的て了解が難かしいと思ふから何か一つ實例を出して話させよう。

恰度今日(二月廿二日)は聖德太子及其妃の薨せられたる命日に當りますから、紀念の爲に太子の信仰の實例を話して見ませう、全體私の信するところに依るに、聖德太子の位置は總ての點に於て、印度に於ける釋尊の地位と頗る似て居ると考へます、共に太子の位置であつて且つ精神上信仰の基を開かれたる教主であります、印度の釋尊は國を捨て家を

六、信仰と法則

世に普通法則とか法律とか云ふ時は何かなしに斯く／＼せざるべからずと命令するゝ規則である、所が斯の如き形式より來る律法は信仰の意味より云へば頗る味ひなきものにして寧ろ是等は破り去らなければ信仰の味ひは現はれて來はしない、即ち宗教若くは道德が單に形式に止りて生命が蟬脱したる有様が即ち此律法的の宗教道德である、此ものは假令之に盲従すと雖ども衷心悦服することが出來ぬのである、故に最後に是等の形式的命令の羈絆を脱して眞實絶對の恵みに接し、信仰生活に入りたる時に始めて此信仰上より湧出る法則がある、即ち信仰の意味より是非とも斯くせねばならぬと云へる強き命令が來るのである、世に道德と信仰の關係に付て色々論ずるが畢竟此の意味に外ならぬのである、即ち信仰無し道德なるものは縱へ律法的に之を命令すると雖ども衷心の悦服は來らぬのである、時として信仰に反するところの律法が無いでもない、故に信仰無し道德は空文の形式に過ぎぬ、然るに一度び信仰に入れば其信仰上斯く／＼せざる可らずと云へる強き制裁力を生じ來るのである、是信仰より來る

出て、法を説かれたけれども聖德太子は國政を執り家庭を形造り人生の上に在つて教を開かれたとの相違であります、即ち聖德太子は日本宗教の釋尊と云つて宜いのであります、そこで聖德太子の一代の行爲は總て信仰の實現となつてあります、其信仰より來る法則が十七憲法となつて現はれたのであります、今其一ヶ條を擧げて太子が佛を信せられた信仰と、又其信仰より來る行爲の標準の如何なるかを示させよう、即ち十七憲法の第十條に斯の如き文句があります。

十日絶忿業、不怒人違、人皆有心、心各有執、彼是則我非、我是則彼非、我必非聖、彼必非愚、共是凡夫耳、是非之理、詎能可定、相共賢愚、如環無端、是以彼人雖瞋還恐、我失、我獨雖得從衆、同舉

之が即ち信仰より來る法則であります、而して此法則は恰も上に擧げた諸ろの信仰の状態を説明するに足るものであります、我必非聖、彼必非愚、共是凡夫耳と云ふ點は理想を以て他人に求め社會に求めて煩悶し不平を起すべきでは無い、結局共に凡夫なれば佛の慈愛を見出さねばならずと云ふ點にあります、既に佛を見出せば之を満足するが故に是非の争休んで互ひに相怒ることが出來るやうになります、即ち

是非之理詎能可定、相共賢愚如環無端、と云ふ心持であります。

既に斯の如き信仰の立つ時は我必非聖、彼必非愚と云ふ謙遜を生じ來れるのであります又斯の如き謙遜の立場に立てば自ら信ずる所あれば必ずしも人の違へるを怒るには及ばぬのであります、勿論自ら信ずればとて自分ばかり善きに限らぬと云ふ反省心があるのが即ち彼是則我非、我是則彼非、と云ふ有様であります、斯く絶対の佛を信じ相對の人生を達觀したる以上は、之を日常の行爲に現はした所が即ち彼人雖瞋、還恐我失、と云ふ忍耐の行ひが出來、また我獨難得、從衆同舉と云へる寛容の徳が現はれるのであります。

是は十七憲法の唯一ヶ條を取上げて例に引いたのであります、斯の如きが聖徳太子の精神であります、故に一代の行爲が現はれたる跡を見るに感心すべき行があります、其上日本文明の親として文學、美術、制度、工藝、百般の上に信仰の光りを現はされたることは枚舉に遑ありません、唯だ一つ世人の餘り氣付かずに過して居る重要な點を擧げて見ませう、即ち太子の家庭の問題であります。

太子の家庭は信より實現したる理想的のものであります。

の文句に太子の理想を能く言ひ現はしてあります、即ち

我身救世觀世音 定慧契女大勢至

生育我身大慈母 西方教主彌陀尊

眞實眞如本一體 一體現三同一身

片域化緣今已盡 還歸西方我淨土

之が眞の同心一體の家庭の根本であつて、所謂相對人生の上に絶対の信仰の出現した有様であります、而して親鸞聖人の如きも此太子の家庭に則つて信仰的家庭を出現されたのであります、尙驚くべきことは、太子が其子孫に遺されたる偉大なる感化であります、即ち後年蘇我入鹿が太子の一族を圍みて攻めたる時其長子山背大兄王を初めとして子孫男女二十三人、皆な心を合せて我身の爲に萬民を煩はすに忍びずとして、寸兵に血ぬらずして悉く身を捨て、敵に施されたのであります、信仰なき人は却て悪しく言ふかも知れませぬが信仰の眼より見れば是程偉大なる壯烈なる慈愛深き力ある行ひはありませぬ、苟も信仰問題に考へを運ばる、諸君は其信仰の程度に従つて、如何程でも味ふことの出來る問題であります、古の所謂身を捨て、法を求むるとか、敵を愛せよとか、又トルストイの無抵抗主義の極を人生歴史上に出現したものであります。

す、太子と膳大妃とは同心一體の和樂なる家庭にして、又太子は其母間人の大后に頗る孝養を盡されたのであります、何より其様子が能く分つてあるは、現今奈良の法隆寺に存してある太子の御病中に祈願の爲めに作られたる釋迦佛の後背の銘に現はれて居ります、即ち其意味は

法興元三十一年の十二月に母の大后が崩ぜられて明年の正月二十二日に上宮法王病に枕して不豫となられた、膳の王后が之れが爲に心配せられて並んで床に就かれた、而して王后始め太子の祈願の爲に此像を作り、命有らば世間に安住し若し定業ならば淨土に昇り早く妙果に昇らんと祈られた。そこで二月二十一日に膳の大妃がなくなられて翌日即ち二十二日に聖徳太子が登遐された。

とあります、之れを見ても其一家の清淨和樂なる様子が自然に現はるのであります、而して此母の大后と聖徳太子と膳の大妃とを一つの廟に葬られたのが河内國磯長の廟であります、依て之を三骨一廟と云ふのであります、私は昨年暮此靈廟に詣て参りました、這は古より弘法大師、親鸞上人、日蓮上人等が之に參籠して大なる靈感を得られたと申す古蹟であります、其廟窟の中に二十句の偈文が彫付けてあります、其中

同情之源

今日報徳會の智徳部の講演に出て私に何か話を致せと云ふ御命令でありまして、此神聖な養育院の事業に御盡力なさつて居るに於て皆さんとお目に懸つて御話を申上ると云ふことは大層喜ぶ所でございます、遠慮なく承諾を申して上りました次第であります。

私は多年此の養育院方へは或は參觀に或は職員の方に御目に懸りました、又中には個人として深く御交際を申して居る御方も御出でになる、餘程親しい關係を持つて居る次第であります、併し今日迄斯の如く皆さんの前で御話を申す機會は無かつたのであります、曾て四恩會に一度伺つたことを記憶しますが、是は五六年十年前のことであつたやうに思ひます。

そこで今日御話を致しますことは同情之源と云ふ此御話を致したら宜からうと思ひます、それで同情之源と云ふのはどう云ふことかと申しまするに、申迄もなく凡ての慈善事業の根底は同情の涙にあることは申迄もないことでもあります、

所が此同情の働き其活動と云ふものが何れより来るかと云うと、唯だ偶然に其活動が来るのではなくして其源が必ずあるのであります、譬へて申しますれば所謂江河の大きな流も其元は小さな水が集つて大きな江河となるやうな具合に、世の中に幾多の慈善事業があります、が其慈善事業の源と云ふものはどう云ふものであるかと云ふ御話を申す積りてあります、其總ての慈善事業の源は何であるかと云ふと、其形に現はるゝ元は言ふ迄もなく此同情の心である。

扱同情と云ふものはどうかと云へば、各個人の中に涙を澀ぐ所の同情に違ひないが、兎に角同じ人間同士であつて、一の者が他の者に向て同情を以て憫れなる人を育て、往く、若くは缺點のある人を引立て、往くと云ふことは、同じ人間同士の間では夫だけの働きは出来べき筈は無いのであります、其大なる同情の来る源は、其同情の心に何か物が無いことに於ては其同情を澀ぐことが出来ないであります、其同情の源は何かと云うと、兎に角此精神上に一の偉大な力が出来て来る斯う云ふことは同情の源であります、もう一つ明かに夫を申しますれば其大なる働きを爲す迄には其一の心の中に或力を得て居ると云ふことがなからねば夫だけのことは出来な

年の若いにも似ず感心なことだと深く感心して、再び観音經をば讀んで聞かせたから尊徳翁益々感じて厚く禮を述べ遂に旅僧は立つて仕舞ふた、此時より尊徳翁心の中に於て始めて世を救ひ人を救ふと云ふ志が湧いて來たのであります、斯う云ふことは報徳記の中に書いてあると思ひましたが年僅に十五歳である、考へて見れば何事もないやうてありますけれど、尊徳翁の精神上に於て非常な一變化を來たして居る、必ずしも此事實が所謂宗教上で申す絶對の光を見たのであるかどうか、斯う云ふやうな専門的の事は第二と致して、勿論尊徳翁の平日の修養の深さにも依るけれども、他の人は唯だ耳に聴き口先に讀んで居る所の經文を心の中に深く讀んで、而して觀音經に書いてある所の觀音の慈愛と云ふ所の同情の源を外に置かず尊徳翁の心の中に感じて、既に夫だけの大きな事業の萌を致されたものであらうと思ふのであります。

尙例を申しますれば御存知の方もありません、北國に慈善事業をして居らるゝ金澤の小野太三郎と云ふ人の事業を見に往つたことがある、小野太三郎と云ふ人は御存知の方もありませんが學問のある方もなく、又今日の文明の智識を以て組織的に事をやる人ではございませぬ、けれども唯同情一片を

い、如何に同情を澀がうとしても如何に人の爲に悲まんとしても其同情の湧出る泉がなければ出来ない、其泉をばお話を申上げます。

所が此報徳會と名を付けて居ります即ち二宮尊徳翁事業の上に景慕されて居る會でありますから、第一番に二宮尊徳翁の歴史の例を申して見ますと、確か報徳記の中に書いてあつたと思ひます、即ち二宮尊徳翁の年十五歳の時に於て自分の隣村の飲泉寺村の一の社に毎夜參詣を致されて深く祈念をして居られた、所が或日の事一人の老僧が來つて其堂に於てお經を讀む、其お經を讀む聲をば尊徳翁が十五歳の時に聞いて居られたが、何とも言ふことの出来ない有難き感情が起つて僅か十五歳の年でありながら心の中に非常な喜びを以て感涙に噎ばれた、そこで其老僧に尊徳翁が申されるには、自分は今貴僧の讀んだ經文を聞いて非常に感じた、夫は一體どう云ふお經であるか、其老僧が云ふのには此は平日人の讀む觀音經である、所が普通の觀音經は一般の僧侶は棒讀みに讀むから意味を了解しないのである、自分は觀音經に點を付けて訓讀をして讀んだので貴下が了解したのであらう、そこで尊徳翁はどうか今の經文を今一應讀んで呉れと云つた、旅僧は

以て多くの人をば救はれたのであります、故に其事業が大きくなつて今は縣の事業に迄なつて居ると云ふことを聞いて居ります、其の小野太三郎と云ふ人が慈善事業を始められた元は、最初自分がお社に數日參籠をした、確か眼病であつたやうに記憶しますが、夫が爲に始終參つて居られたか遂に或日非常に心に喜びを感じて、其歸り途に社の傍らに居た乞食を連れて家に歸つて來たのが小野太三郎の事業を始められた元であると云ふことを聞いて居ります。

是等の事業を何氣なく聞いて、唯ださう云ふ感心な人だからさう云ふことがあつたのだと斯う云つては見様か祖末になつて仕舞ふ、後に現はれた大きなものよりも其初めに感じた心、もう一つ云へば一時感じたのではない其所にある偉大な精神状態になつて、憫れな者を見ては、しつとして居られぬ可哀相な者を見れば是非憐まなければならぬと云ふ風になつて來る、夫が同情の源である、昨今大層日本で人の耳目を引いて居ります萬國青年大會であります、其萬國青年大會と云ふものは今では大きな團體になつて居ります、其團體の起つた起原はどう云ふのであるかと云へば、あれは倫敦より田舎の方にある一の會社のやうなものがあつて其處に雇はれて

居たジョージウキリヤムと云ふ人が十八歳の時に自分の同僚若くは小僧とか云ふやうな者と共にどうか能く信仰を味はつて往きたいと云ふ極くもうさ、やかなことが元になつて、而して集會を始められたのが即ち青年會の元でありまして、其時の書き物を一寸見たことがあります、ジョージウキリヤムの如きは非常な信仰深い人である爲に初めは物置か押入のやうな中に這入つて自ら禱りをして居つたと云ふ年の若い信仰者であつた、其人々が互に寄合つて、丁度皆さんが斯う云ふ具合に智徳を養成する爲に此會をなされるやうな按排に、つまり仕事の濟んだ後に寄合をするとか云ふやうな事が元になつて漸々發達をして遂に世界的のものになつたのであります、又今度來られたブリス大將の如きもメソジストの一の牧師であつたのであります、東倫敦の貧民窟の方で事業を始め遂に今日の大なる成績をば擧げられたと云ふ次第で、是等は近頃人の耳目に著しく映じて居るのでありますから是を例に引いて申したのであります、結果を申しますれば非常に大きい其源を云へば、其泉の源は皆な小さな所でありまして、併ながら其處から湧出る同情の慈愛の念其物が餘程是は肝心なものであらうと思ふのであります、夫を明瞭に申すならば即

ち宗教の信念になつて仕舞ふが、信念と云へば今此處に在る經文を讀むとか、或は何の教をば信ずるとか云ふ風な形の上にて於てよりも此人間の心の上に實際活きた力の湧いて來る夫が其元であります、其處を第一注意をしなければならぬのであります。

今申上げました多くの例の何れもが信念の源でありますから、私其點をば成るべく皆さんの平日の御考に感じてお在でになる所に適ふやうに、又曾て私がさう云ふ問題に付て非常に自分の苦心を致しました經驗に照して、今の同情の源が信念でなければならぬと云ふことを是からお話をしやうと思ひます。

人は平日理想的に考へれば、誰と雖ども善を爲すことを理想とせざる者はないのですから善い事をしたと云ふことは誰も思ふ、又誰でも利己的な事は悪いと云ふことは能く知つて居る、夫でありますから若し理想的の社會と云ふものを十人なら十人の者に言はして見れば十人同じ事を言ふに違ひない、憐れなる者は救ひたい、自分を捨て、も助けたいと云ふ、所が尙一步進んで平日人が思ふやうに自分も實地行ふことが出来るか、平日の理想として居る通りにやつて往けるか、斯

う考へると、其點に至ては斯くお話しして居ります私自身が、其平日思ふて居ること、實際自分が其場合に臨んだ時とは決してさう云ふ風に一致することは出来得ないのであります。殊に慈善の事業と云ふものは表面の名前になつて居る。即ち此宗教のやうな具合に人の爲にすると云ふやうなことが表面出してある名前である、故に人もさう思ふてあらうし又自己も犠牲にならうとも何のやうな困難に合はうとも自分を捨てて人の爲に善くせねばならぬと思つて居る。

若し一步進んで、人より自分を悪く思ひ、又自分が親切にして居るのを其親切を親切とも思はず、却て先方が怨むやうなことがある場合ありとすれば何うかと云ふに其處が肝心な問題であります、斯う云ふ場合になりますと吾々人間はどんなに善勞しても飽く迄も人の爲にするのである斯く平日は思つて居る、併し實地の場合になると心に満足して居られぬから形に於ては出來ても心で出來ぬ場合が多いのであります、さうすると其場合に善い方面許り言ふては往けませぬから人間の弱點を云はなければなりません、自分は斯うして、もつまらない他人が勝手な事をするのである、然るに自分は斯う云ふ場合に犠牲的に全く斯う云ふことをして居ると云ふこ

とは實につまらぬことである、斯う云ふやうな念が若し其處にありしとしたならば、非常に理想として今迄言ふて居つた考と云ふものが事實に於て取れて仕舞ふ、誰も言ふことではありません、献身的にやらなければならぬ、犠牲的にやらなければならぬ、献身的犠牲的と云ふことを思ふて夫を力にして居る間は其處に一種の自信力があるが、献身的も犠牲的もつまらんと云ふ念が一逼萌して來れば自分の取つて居る事が無意味になつて來る、無意味になつて來たならば今迄考へて來たこともガラリと變つて仕舞ふ、是は今日必ずしも慈善とか若くは宗教に關係して居る人のみの問題ではない、人生全體の問題である、友人同士の間に於ても、同僚間に於ても皆な此問題が今日は十分に解けない、解けないから人が色々煩悶をしたり、色々な悲哀な聲を揚げることに今日はなつて居るのである。

斯う云ふやうに五分々に世の中に往つてさへもさう云ふことがある、況や今申す通り献身的犠牲的に働かねばならぬと云ふ位置にお在での人であれば、尙更其根底の或物が無かつたならば今の歎きはどうしても出て來る、五分々々でさへも人が利己的であるとか社會は勝手なことをして居ると

か思つて居る。夫に尙一方では理想としても高く持つて、假令先方が悪く思つても此方が善くしなければならぬ、先方は斯う云ふても此方は五分々に應じてはならぬとか云ふには其處に安んずる源がどうしてもなければ往けない、どうして人も相手に事を考へたならば往かせぬ、人はあのやうに勝手に云ふ、我は斯う云ふやうにせねばならぬ、人を目當にして自分は斯うしなければならぬと考へたならばどうしても自分を安んずることが出来ないのである。

然らばどう云ふ風にしたならば其處に眞の安慰が来るかと云ふと、全體人相手に事を考へると云ふことは根本的に間違つて居る、人生は人相手に考へると大きに間違つて居る、尊徳翁が經文を聞いて感じた、若くは古今の慈善家が油然と慈愛の念が其處に湧いて來ると云ふのは人相手でない、他の方面に實に偉大な妙味と云ふものを其人の心の中に感じて來るのであります、普通の人ならば自分が五分疑へば必ず人が五分疑ふ、此方が十疑へば向ふが十疑ふ、此方が十だけ隔てば人が十だけ隔つて來る、然るに先方が五分だけ悪く思つても此方は五分だけ善く思ふとか、先方が十だけ悪く思へば此方は十だけ善く思ふと云ふことは實際出來ない、夫が若し人間とし

て出來得たならば心の惑が解けて仕舞ふ、若し茲に皆さんが悪く思ふ人があつたとすれば其悪く思ふ人を善く思ふと云ふことは出來るか云ふと夫は出來ない。

尙一步進んで後にはどう云ふことを考へるか云ふと此方が五分悪く思へば先方が五分善く思ふ、此方が十悪く思へば先方が十善く思ふと云ふことであります、しかしさう云ふことを社會からは望まれぬ、暗黒の世の中に住つて居ては何う考へても善くなり得ることは出來ない、私の中心に要求するとはどう云ふことを要求するかと云へば、絶対に此方が悪く思つても隔つて居つても、先方から隔つずに、此方が五分悪く思へば五分先方から善くする、此方が十悪く思つても先方から十善くする、此方が百隔つても先方が百の同情を以て向つて來るやうになることを中心に要求するのであります、百隔つて居るものを百の同情を以て迎ふ、此方が十悪く思つて居るものを十善く思ふと云ふのは、夫を人生に考へて居る間はどうしても解けない、二宮尊徳翁が觀音經に於て氣が付いた、人に許り求めて居るから満足が出來ないのであります、夫が氣が付いて見れば前に思つたことは皆間違つて來る、是は自分の精神上の經驗に照らして、殊に今日の一般の思想界

の要求の點を見て私は一寸今話を申したのであります、其同情の源を味へば味ふ程夫が事業に現はれて始めて献身的になる、初めから五分々々の考では出來るものではない。

其例として日本の古代の例の一二を申して見ますと、先づ養育院に於て始終お話のあります聖徳太子などの行はれまし事業と云ふものは、今日之を遡つて考へますと先づ施藥院、療病院、敬田院、悲田院の四つの院を建て、病人の爲に療治をしてやるとか、困る者には藥を與へるとか、聖徳太子がア、云ふ慈善をされた其源は何れにあるか斯う申しますと叮嚀に申せば切りがあまりませぬけれども、聖徳太子が最も信じて讀まれた所の勝鬘經と云ふ經文は勝鬘夫人と云ふ夫人が説かれた經であります、其經文の中に勝鬘夫人が自分の信念を告白された信念が書いてある、聖徳太子が其勝鬘と云ふことを自ら自分の名に取つて佛子勝鬘と云はれて居つた次第であります、其勝鬘經の中に十大受と云つて十の大きな誓の中に、世の中の孤獨寡癯瘵疾幽繫、さう云ふ憐れな人間を暫くも捨てずして悉く之を助けよと斯う云ふ誓がある、世の中の孤兒、老ひて子なき所の人、廢疾幽繫さう云ふ者は助けよと云ふことがあつた、其次に三大願と云ふことがあつた、三大願と云ふの

はどう云ふことかと云ふに、自分が此事を爲す爲には自分の身を捨て、人を救ふと云ふことが書いてある、所が今申す通り聖徳太子の實行せられた慈善事業が、平日讀んで居る所の經文の事柄をば事實に現はして皆な實行して居てになる。續いて光明皇后の事を申し上げます。

光明皇后は初め日本中に國分寺を建てましてさうして奈良に總國分寺と云ふのがあつた、而して聖武天皇の時分に大なる事業を爲したいと云ふ考を持つて居て居つた、所が或時内殿に聲あつて憐れなる病者を自身で救へと云ふお告げであつた、餘り不思議などであるけれども信仰の味ひから云ふたならば良心の聲とても云ひませうか、茲に於て藥湯を以て千人の病人を洗ふと云ふことを思立たれて、皇后自ら手を下して是等の憐れな病人を九百九十九人迄洗つた、然るに千人目に至つて非常にきたない癩病の貧民が見えた、さうして皇后に向つて洗つて呉れと云つた、皇后は如何にも其姿の醜い爲に心頗る躊躇する所があつた、左りながら自分が千人迄洗はうと云ふことを誓つたのであるからそこで其病人を洗つておやりになつた、さうすると其病人が自分の身體を吸つて呉れと云つた、そこで皇后が其通りしてやつて而して「汝を洗つ

てやつたことを人に話すな」と仰しやつた。さうすると其癩病人が忽ち佛の姿を現はして「阿闍佛を洗つたと云ふことを人に告げるな」と云つて飛去つて仕舞つたと云ふことが元亨釋書に載つて居る、此事實は一寸見ても簡單でありますが非常に教訓が籠つて居る、先づ第一番にどんな大きな仕事をしても慈善の心を爲すには自ら手を下して人を救はなければならぬ、九百九十九人迄助けて千人目にさう云ふ病人が現はれて來たのであるから是では堪らぬと思はれたが、夫にも拘らず洗つて遂に目的を達したと云ふのは一の信念があつたからであります、尙進んで皇后が人に語る勿れと云ふことも實に味ひのあることあります、善いことをしたのに拘らず人に語る勿れと云はれたのは實に味ひがある、若も五分だけ善いことをして而して五分だけ語つて仕舞つたならば五分だけ蓄めたものを五分だけ出して仕舞つたやうなものである、五分だけ語らずに置けば夫だけ溜めて置くやうなものであります、之を語る勿れと云ふのは味ひがある、所が五だけ無いものを餘計云ふ日になると名譽に對して借金をするやうなものである、皇后が斯う云ふ慈善をせられたと云ふのも自分の心の中に信念があつたが爲であります、申す迄もなく皇后は婦

人の標本とも云ふべき立派なる人でありませす、現に皇后の建てられたる法華寺の觀音の像は皇后の姿を元として彫刻をしたもので、美術としても奈良朝時代の著しいものであります、又今の信仰の上から云ふたならば餘程深き味ひがあります、謂はゞ皇后が觀音の慈愛を信ずると云ふ其信念に依つて總ての事が出來たのであります。

以上申述べたことの其同情の源と云ふものは、どうしても信念に依らずんば出來ないのであります、時間も丁度來ましたから今日は是迄に致して置きます。(於東京市養育院)

四月はじめ、急性流行感冒に侵されました上、同月下旬より五月一ばい地方へ傳道いたし、寸暇なく、遂に四月、五月の求道は休刊となりました。何分事情御察し下され不惡御用捨を願ひます。

愛讀者諸君にはこの様に延引するにも係はらず、熱心に日々本誌を御待ち下さいました事は實に感謝に堪へませぬ。

宗教界唯一
の日刊新聞

中外日報

每號六頁

紙代、郵送費共

一ヶ月 三十一錢
半ヶ月 一圓九十錢
一ヶ月 三圓六十錢

創業第十一年に入り、既に二千號(九月二十二日)を發行す

教界に於ける當代知名の文士論客は擧げて我紙上に筆を揮ひ
光彩常に陸離として蘭菊美を競ふの偉觀を呈す。

京都 下京區妙法院 前側町四二八 中外日報社

(特電九八九番)

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ、一般に道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なきものは、確實なる信念を樹せむとして胸中幾多の苦悶を抱き、社會實務の人にして志操清浄なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に酸辛を嘗めざるはなし。嗚呼、信仰の幾、現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也。

昨年已來、聊か此の時運の必要に應せむとする微志あり。先輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道學舎を設け、此等の道を行はせむるの人心を宿に充て、實踐を同じくして共に實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潜めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に從ひしが、幸に佛陀冥祐と、師友同情とによりて其期する所空しからず、學舎は常に満員にして幾多の申込に負ひ、餘暇場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘なし。此に於てや止むなく懇切なる道友の勸告に従ひ、餘舎を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。幸に篤實なる先輩の指導に従ひ忠實なる親友の贊助を仰ぎ、至願なる實行によりて漸次其結果を挙げむことは實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ず事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未だ容易に實行に結ぶる所なき。故に先づ現時の必要に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進むることを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛敎者一般の需要に充て且つ清潔なる社會の中心に供せむと欲す所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細調査し來りて、此等の事業の我國佛敎者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得は幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十六年十月 發起者 近角常觀

求道會館設立喜捨金
受領報告(第二十回)

- 一金參圓也 東京 小林 秀 知殿
 - 一金貳圓也 金澤 河崎 順 子殿
 - 一金貳圓也 羽村 中里庄五郎殿
 - 一金五圓也 福岡 有田 廣殿
 - 一金五圓也 福岡 有田 夫 人殿
 - 一金拾圓也 東京 西川 藤 吉殿
 - 一金壹圓也 東京 佐々木 菊 水殿
- 小計 金貳拾八圓也
- 通計金貳千參百參拾八圓參拾八錢也

右御寄附と忝ふし難有奉
存候茲に謹しんで奉感謝
候也

近角常觀著(第九版準備中)

信仰之餘瀝

定價拾五錢 郵稅貳錢

近角常觀著(再版準備中)

人生と信仰

定價貳拾錢 郵稅壹錢

近角常觀校訂(再版準備中)

冠頭歎異鈔

一册郵稅共七錢(定借五錢郵稅二錢)但三册までは郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區 森川町一番地

求道發行所

近角常觀著(第三版)

懺悔錄

定價貳拾錢 郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區 森川町一番地

求道發行所

規定

- 一、本誌は毎月一回發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし、轉居の節は新舊兩所の住所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一册
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十年六月十日印刷
明治四十年六月十四日發行

發行所

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
求道發行所

大賣捌所

東京市神田區神保町 東京堂



前號要目

求道

◎信仰之極致

感謝

◎まことの心◎如來の加威力◎遠く宿縁を慶べ◎佛縁を結べ

講話

◎驕慢と弊と懈怠

告白

◎明來暗去

教誨

◎教誨自誠

二、佛を除きて餘は能く救ふこと無けん

近角常觀

近角常觀

田中みな

講義

◎歎異鈔—第三章

嘆咏

◎瑤絡(短歌)

◎清涼光(長詩)

紹介

◎小池十種◎靈海新潮◎人生の要路◎自信録

時報

◎安中佛敎青年會◎横須賀求道會◎傳道日割◎講話題

感想

◎和國敎主聖德皇

近角常觀

左千夫

甲之

近角常觀

求道第四卷第拾號 明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可 明治四十年六月十四日發行(毎月一回發行)